
すれちがいの季節

夢追い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すれちがいの季節

【Nコード】

N4344P

【作者名】

夢追い人

【あらすじ】

バスケットばかりに夢中になっていた中学三年生の男子、初めての恋は、春の長閑な景色に埋もれた美しい情景であった。ひとつ年下の彼女に翻弄されながら、初めての恋愛に傷つきつつも、人生の壁にひたむきにぶつかっていく。しかし、神様が与えた試練はあまりにも厳しいものであった。

春のひざし（前書き）

前半、春の風景はキャンデイズさん「春一番」松山千春さん「季節の中で」「青春」「君が好きさ」を、夏祭りのシーンではさだまささんの「ほおづき」を聞きながら読んで頂くと雰囲気があります。（古くてすみません）

春のひざし

すれちがいの季節

一 春のひざし

『涙を拭うと、そこには柔らかい春があった……』

私は屈託した心を癒すため旅に出た。それはもう二十年も昔のことである。

あの頃のことをこうして文字に残すつもりは毛頭なかったが、年月というものの浄化作用なのか、どんなにつらいことも思い出として肯定的に認知してしまう實際が恐ろしくさえ感じる。

忘れようと努めてきたはずが、実は忘れまいと努めてきたのだという事実を自覚したとき、私の人生の中で最も激しい思い出を綴ろうと決心した。

もしかすると、社会に出て仕事を持ち、家族を持ち、普通の幸せを手に入れた余裕なのか、青年期から壮年期に移りつつある今、自分の青春時代への感傷なのかも知れない。

だが理由は何であれ、とにかく書きたいと思う心の叫びに従って記憶が曖昧になってしまわないうちに書き残したい。十代の出来事で一番大きな出来事……そして私の人格形成に一番大きな影響を与えてくれた女性のことを今から書き進めて行く。

中学卒業後の春休み。高校入試にも合格し、重苦しい受験生活から解放された最も楽しい時節に、友人と三人で兵庫県の淡路島に出かけた。

それは自転車の旅であった。まだ肌寒さの残る春の曙に出発し、昼前に岩屋港に到着した。私達の目的地は、そこから更に二十キロ程度島の西岸を南に下った所にある小さな漁村であった。

別段、景勝の地でもないし、観光スポットがある場所でもない。

夏に海水浴ができる程度の無名な町であったが、私達の故郷から自転車の旅をするのに、適当な距離の所にユースホテルがあったので、そこに決めたのである。私達三人は海岸通りをのんびりと走り始めた。岩屋の街をくぐり抜けるとすぐに静かな海岸線が目の前にひらけた。道路は崖の端を縁取るように伸びており、所によっては海面から数十メートルの高さがあった。そんな高い位置でも波の音は聞こえてきた。それほど静寂であった。

広々とした蒼い敷物の上には、模型のような船が浮かんでいた。大きな貨物船は、遠くの方でのんびりと春風に身を任せているし、小さな漁船は、こぜわしく波を蹴って白い帯を引きずっていた。

人は美しい景色や風景に出会ったとき、恋しい人と共にその美しさを享受したいと感じることが多々ある。草花の香りが漂う野原を二人で駆け回り、淡い日差しを全身に浴びて、青空に浮遊する真白な雲を数えられたらどんなに幸福であろうか……。

温和な春景色を目の当たりにして、ふと、そんな空想に導かれてしまった。そして、同時に一年前の楽しい思い出が蘇り、つい懐古の念と共に回想の中へと引きこまれて行った。

ちょうど一年前の春の時節。その日も今日のように穏やかで静かな春日よりの朝だった。

春休みに入っていた私は、いつものように部活動の練習に出かけた。私はバスケットボールをやっていた。一緒に旅している河口と田山も同じである。私達の部はそれほど強くはなかったが、練習だけはどこにも負けない位に一生懸命にやっていた。

その日も、いつもと同じような練習内容であったが、なぜか私の身体の中で、何かうきうきと躍動するような、マグマのような熱い塊がうずいていた。朝から、春の日差しに照らされた満開の桜並木の、淡い色彩に心を染められながら登校して来たためなのか、それとも、単に昨夜よく眠ったためなのか、何か新鮮な充足感にみなぎ

つていた。もしかすると、その後の運命の出会いを予期していたのかも知れない。

その日の練習も終盤となり、体力的にかなり疲労してきたところに三人の女性が体育館へ入ってきた。私は練習に夢中で彼女達に気づかなかつたが、卒然、振り向かずにはいられない、何とも爽やかな声が男達の熱気の間をくぐり抜けて館内に響き渡った。ややハスキーで、明るく張りのある声だった。過去に聞き覚えのない種類の声であった。

練習の合間を見て、チラリと彼女達に視線を送った。三人の小柄な女性が並んでおり、その中の真ん中の女性にとりわけ目を惹かれた。

そして、期待どおりにその女性から先程の声が発せられたとき、今朝から私の心の奥底でくすぶっている、希望に満ちた熱くて甘い希望のような物が一気ににはじけた。

その瞬間から、彼女達がそこを立ち去るまでのわずかな時間、私の心身は雲のように軽く、闊達に稼働した。そして、少しでも多く彼女の姿を捉え、素敵な笑顔を脳裏に焼き付けようと努めた。

その後の二三日というもの、練習中にはいつも彼女の出現を期待して、ときどき周囲を捜したりしていたが、期待も虚しく小さく嘆息するだけであつた。やがて、時間の経過とともに、脳裏に焼き付けた筈の容姿はまぶたには浮かばず、声だけが聴覚の記憶に留まっていた。

そうして虚しい数日を過ごし、ときめきの余韻も醒め始めた頃、春休み中で唯一の部活動の休日に、同じバスケット部の河口からサイクリングへの誘いがあつた。河口と、彼がつきあっているバトミントン部の岡部直子おかへななおしが中心になって企画したイベントであつた。

バスケット部とバトミントン部の各々三人ずつで、花見サイクリングをしようという企画であつた。私は、折角の休みであるからゆつくりと寝ていたいと言って断つたが、直子に頼み込まれては嫌とは言えなかつた。

直子は一歳年下であるが、河口と付き合っていることもあり、普段から何かと気配りをしてもらい、私の苦手な学生生活の細々とした事で世話になっていたからである。

プー。突然一台の乗用車が、三人を疾風の渦の中に巻き込んだ。長閑な春に酔い、一年前の回想に耽っていた私は、車のクラクションに肝を抜かれて一瞬よろめいた。そんな私の後ろ姿を発見した田山が大声で笑った。

考えてみれば、田山や河口とこうしてサイクリングへ出掛けるのは、あの時以来であった。

「あと、どのくらいかな？」

私は照れ隠しに後ろを振り返りながら尋ねた。

「さあ、居眠りしている間には着くだろう」

田山は、生返事を返しながらにやにやと笑っていた。私は前を走っている河口の様子を伺ったが、彼は私と田山の会話には全く無関心な様子で、

「海は広いなあ、大きいなあ……」

と何度も同じ歌を繰り返し歌っていた。束の間の会話も途切れ、また沈黙が訪れた。河口の歌声もいつの間にか消えていた。その眠気を誘う長閑さと、静かな春風の沈黙に包まれた私は、再び回想の世界へと引き込まれていった。

約束の朝八時頃に、私は集合場所である、桜並木のある校庭の広場にふらふらと自転車を走らせた。校門をくぐると、通路の両側に桜が真すぐに正面玄関まで続いており、並木の両側が緑の広場になっている。

私はすぐに河口と田山を発見したが、二人は三人の女性との話ちに夢中になっていて、私の接近に気づかなかった。三人の女性達は私の方に背を向けて話していたので、誰だか良くわからなかったが、直子らしい後ろ姿だけは見分けられた。

微風が吹いて桜の花びらが小雪のように舞っていた。私は自転車を止めて、桜の細雪が甘い香りとともに軽やかに宙を舞う様子にぼんやりと見とれていた。

そんな私の視界に、同時に振り向いた女性達の容姿が一度に飛び込んできた。まるで時間が止まったような、ゆっくりと淡い瞬間であった。

五人の男女が同時に私の方を振り返ったのに、私には一人の女性しか目に入らなかった。それは、いつかの素敵な声の女性であった。小柄な彼女の肩に静かに花片が舞い降りたように感じた。

「おはよう」

私はすぐにみんなを見渡して挨拶した。

「おはようございます」

女性達からの返事はあったが、男二人は少し笑みを浮かべて片手を軽く挙げただけで声は発さなかった。いつものことであった。

「内海さん、早速ですけど紹介しますね。こちらがバトミントン部の同期で、田山さんとお付き合いしている山野順子さんです」

「はじめまして、内海さんのお噂はよくお聞きしています。よろしくお願いします」

「こちらこそ。僕は全然知らなかった。田山にこんな可愛い彼女がいたなんて」

そう言って田山を冷やかし半分の目で見つめたが、彼はそ知らぬ風に桜の枝振りを眺めていた。

「そして、こちらが同じくバトミントン部同期の美澄麗華さんです」

「はじめまして、私も内海さんのお噂はかねがね伺っています」

そう言って笑顔を浮かべてちょこんとお辞儀をすると、肩にやや触れるくらいの短い髪が微かに揺れた。淡いピンクのカーディガンが柔らかな日差しに包まれて、若々しい新鮮な雰囲気強調していた。

「どうせ良い噂はしてないよな」

私はそう言って男達に視線を向けたが、

「まあな」

と、にやりと笑っているだけで、それ以上何も答えなかった。どうも、二人の様子がいつもと違うので怪訝な雰囲気であったが、彼らもそれぞれの彼女を連れているので、照れているのかも知れないと悟った。

「いえいえ、とっても素敵な方だなあっていつも噂していますよ」麗華^{れいか}にお世辞を言われると、急に嬉しくなつて破顔しそうであったが、そんな心音を河口達に見透かされそうで、

「ありがとう。とにかくよろしく」

と、淡々とした口調でその場を切り抜けた。私はしばらくの間、唐突な幸せの訪れに戸惑い気味で、自分でも言葉や態度がぎこちなくてもどかしさを感じていた。

私達一行は、ゆっくりとした速度でサイクリングに出発した。私達の町から二十キロほど離れた山間に湖があり、自然公園になっていた。そこまでの道のりは、田畑や野原が広がる自然に恵まれた風景であつた。

六人は、長閑な田舎道を時には横一列になり時には縦一列と、縦横無尽に好き勝手な走り方をしたが、自動車の通行量も少なく、若い笑い声と弾む語気を周囲に発散しながらペダルを踏み続けた。

私も麗華も最初にはにかみ気味であつたが、次第に打ち解けてゆき、いろいろな情報を交換した。例えば、彼女には三つ違いの兄がいてとても慕っていること。ピアノを弾くのが好きなこと。バトミントンは好きだが下手であることなど……。そして、私も部活動のことやら家族のこと。河口や田山の明るくて呑気な性格のことなどを話した。時々、相槌の変わりに浮かべる彼女の笑顔は、彼女の履いている白いジーンズよりも眩しく感じられた。

「内海さんには、付き合っている彼女はいらっしゃらないの？」そんな立ち入ったことも尋ねて来た。考えてみると、私と麗華以外はそれぞれカップルである。何となく、今日の企画が仕組まれたもののような気配を感じずにはいられない。しかし、そうだとしても今日のところは有りがたく感謝したい気持ちで一杯であつた。

「残念ながら……」

実際、女性に気持ちを告白する勇気などなかったし、そんな行動に出る前に、自分自身の中でその女性に対して失望してしまうことが多かった。

「嘘はだめですよ。内海さんのファンはたくさんいますよ、私の周りにも」

「ファンねえ、出会ったことないけど。本当なら嬉しいね」

私は軽いお世辞と受け取って、にこりと笑みを浮かべた。どこかの鶯の鳴き声が山肌にこだました。

私達は、目的の湖の手前にある丘陵地で昼食を摂ることにした。丘の登り口にある神社の脇に自転車を止めて、そこから徒歩で山道を登った。ハイキングコースになっていて歩きやすい道であった。鶯の鳴き声があちこちから響き、山桜も満開であった。ものの二十分も歩くと、それまでの狭い山道が突然開けてキャンプ場の平原が現われた。

三十メートル程の高さの崖から小さな滝が流れ落ちており、その山水が小川となって下の湖の方へ流れている。その小川の辺で昼食の弁当を開くことにした。

しかし、私の意に反してみんなはまるで打ち合わせていたかのようになり、それぞれのカップルで思い思いの方向に散らばっていった。その場には私と麗華だけが取り残された。二人は呆れ顔を浮かべて立ちすくんでいたが

「俺達も場所を探そうか」

と言う私の言葉に彼女も頷いて歩を進めた。小川の辺に大きな岩があったので、そこに腰を下ろした。麗華は小川に手を浸して満足気に微笑んだ。恐らく期待通りに水が冷たかったのであろう。

私は腹が減っていたのでさっさと弁当の包みを開いた。彼女も意外に大きな包みをバッグから取出して、私の前で開いた。サンドウィッチやフルーツ、お菓子などが出てきた。

「みんなで食べようと思ってたくさん持ってきたのに……。内海さ

んに責任もって食べてもらいますからね、全部」

そう言って私の前に紙の皿を置き、サンドウィッチを山盛りにして積んだ。私は早速ひとつかみして頬張った。

「うまいよ。君が作ったの？」

肉親以外の女性が作ったものを食べたのは初めての体験であった。すぐく大人になったような妙な満足感に浸った。

「本当ですか？良かった。勿論私が作りましたよ、少しは母に手伝ってもらいましたけど」

朝顔が開いた瞬間のような瑞々しい笑顔を浮かべたが、すぐにはにかんだ様に俯いて、彼女も卵サンドを半分にちぎって　に運んだ。

「魚はいるのかなあ？」

私は川の流れに目を凝らしながら言った。

「こんなにきれいな水ですから住んでいそうですね」

「魚釣りはしたことある？」

「幼い頃に父に連れられて行っただくらいですね。内海さんは？」

「小学生の頃はよく釣ったけど、最近は部活ばかりでね。でも、釣れた時のずっしりとした竿の感覚は覚えているよ。あれはたまらないね」

「へえ、そうですね……私にはよくわからないけど。でも魚を食べるのは好きですよ。お刺し身も好きですけど、鯖の煮付けなんかも大好き」

「へえ、珍しい人だ。俺は煮付けなんて食べないよ。焼き魚もあまり好きじゃない」

「内海さんこそ変ですよ、どうして焼き魚が嫌いなのですか？」

「骨を取るのが面倒でね」

「なるほどね。内海さんのお嫁さんになる人は苦労するでしょうね」

「俺は結婚なんてしないよ。家庭なんて面倒くさいからね」

「そんな風に言う人ほど早く結婚するって、テレビで言っていましたよ」

麗華は缶ジュースを開けて私に差し出した。

「ありがとう。君は良いお嫁さんになれそうだ」

そう言つてごくりと咽を鳴らしてジュースと共にハムサンドを飲み込んだ。

「よろしければまだありますよ」

彼女はもう一つの包みを私に手渡した。

「ありがとう。でも、まずうちのお袋の弁当から片付けるよ。残して帰ったりしたら二度と作ってくれないから」

私は真面目に言っているのに、麗華は冗談だと受けとめたのか大きくきれいに笑った。

私たち二人は食事を終えると、岩から降りて、筑紫が混じつていそうな、五センチ程度の雑草が共生している草むらに腰を降ろした。柔らかい日差しが私達の心まで暖めてくれた。折節吹き寄せる若草の香を含んだ微風が、満腹の私を眠りに誘った。結局、私は母が作った弁当と、麗華が作った弁当とを全部食べてしまった。私は両腕で体を支えるのに疲れて仰向けに倒れた。私を真似るように麗華も仰向けになった。

「気持ちいいですねえ」

目を閉じたばかりの私の鼓膜を、新鮮な彼女の声が心地よく振動させて、脳裏にさわやかな刺激が走った。

「春はいいよ」

「きれいな雲ですね」

また彼女の声が響く。目を閉じて聞いているためか、より魅力的な声質が体内で反響して、静かに溶け込んで来るようであった。

「雲がきれい？俺は青空がきれいだと思うけど」

「どちらでも良いですけど、まずその目を開けて見て下さい」

私は言われた通りに目を開いた。青空にばかりと白い綿雲が浮かんでいた。雲がきれいと言う表現の方が適確なようにも思えた。

私は彼女とは反対方向にごろりと半回転してうつ伏せになった。

名も知らない草花が、気が遠くなるほどたくさん共生している。

その中の黄色い草花をちぎり取り、私の髪に飾ってみた。そして右

腕を肘枕にして横寝の状態になり、彼女と向き合えるようにしてから
「どう、似合う？」

と、目を閉じている麗華に問いかけた。彼女はやや眠そうになっている
素顔を私の方にむけた。そして私と同じように左腕で肘枕を作
ってから

「春ですね」

と、子どものいたずらを見つけた母親のような柔和な笑顔で私を包
み込んだ。

私は腕を伸ばして、その髪飾りを彼女の短めの髪に差し込んでみた。
とてもさらさらした髪であった。彼女は右の手で髪飾りの位置を少
し直しながら、

「似合いますか？」

と、問いかけてきた。私は横になったままで小首を傾げて見せてから
「美澄さんは好きな人いないの？」

と、突然自分でも驚く質問を口にしてしまった。しかし、彼女は私
がしたように、少し小首を傾げただけでふっと仰向けになってしま
った。そして暖かな春風が二人の間を通り抜ける間の沈黙の後、麗
華が何やら寂しそうに呟き始めた。

「一つ二つ三つ……」

私は何か言おうとしたが、虚空を見つめる麗華の無表情な表情を見
つめていると、何やら近寄りがたい畏怖の念を覚えて何も言葉を選
べなかった。仕方なく私も仰向けに寝転がった。と、同時に彼女の
数えているものが目に入った。どうして麗華が雲の数を数えている
のか理解できなかったが、多分、私の図々しい質問が気に障ったの
だろうと解釈して、とにかく機嫌が直るまで黙っていることにした。
午後一時を過ぎた頃、六人は丘を下り始めた。みんなが出発準備
を整えた頃には、再び麗華は明るさを取り戻していた。

さつき登って来たコースとは反対側に下って、湖に抜けるコース
であるが、山道は狭く急峻で、所々に足場の悪い所もあり、女性に
は少し険しい道であった。他の連中はしっかりと手を取りあい、歓

声をあげながら喜色満面で山道を楽しんでいる。

しばらくの間、私は沈黙を守り、列の最後尾を静かに歩いていた。私は、麗華にさっきのように不可解な態度を取られはしないかと少々恐れていた。だが、いつまでも黙っているわけにもいかず、足場の悪い所で手を差し延べてみた。

「すみません、ありがとうございます」

そう言つて私の腕に体を預けてきたが、思ったよりも軽かつたために、余計に愛らしさを感じた。そしてそのまま、他の連中と同じように手を離そうとはしなかった。

私はとりわけて話題を持ち出せなかつたので口笛を吹き始めた。すると、驚いたことに彼女がその歌を口ずさみ始めた。途中から一緒に歌った。一オクターブの音階差がきれいに調和していた。

やがて六人は湖の辺に出てきた。湖の周囲には、満開を迎えた桜や山つつじの蕾が、その美しさと甘美な香りを巧みに織り交ぜて、その姿を湖面にまで映し出していた。湖の対岸は、湖面の細かな反射のために眩しく輝き、まるで浮島のように湖面に浮かんで見えた。ここでも自由行動となり、私と麗華はボートを借りて湖に出た。

緑の木々が豊富な山々から、鶯の鳴き声が絶えることなく発せられ、周囲の山肌にも湖面にもこだました。時折、そのこだまを遮断するように雉の声が鋭く響いた。

湖の中央辺りに着た所で私はボートを泊めた。麗華は先程から湖底を見ようとして目を凝らしているが、見えるはずもない。空模様は、相変わらず吸い込まれそうに澄んだ青色を呈していた。微風に撫でられて起きる小波が、舟に当たっては砕け散る音を奏でて、その単調な繰り返しに長閑な眠気に誘っている。

私はすっかり春に酔ってしまった。彼女は左手を伸ばして湖水に触れてみた。

「冷たい」

そう一言言つた後、しばらく湖水に手を遊ばせたままで黙した。私は麗華の幼い素直な表情を見つめてみると、何やら熱くなるものを

感じた。いや、はつきりと心惹かれる思いを実感した。しかし、恋心を抱いて悶々と生活するのも嫌だったし、振られて傷心するのも怖かった。だから、何とか気持ちを沈めるため、成るだけ主観的な観察をさせ、客観的に分析を試みようとしていた。

「ここでボートが沈んだら一緒に沈んでしまうでしょうね？」

彼女が冗談紛いに物騒なことを呟いた。

「死にたいの？」

「まさか」

「それなら泳ぐことだね、向こう岸まで」

「私、泳ぎは得意じゃないです」

「俺はあまり会話が得意じゃなくてね、さっきも何か気に障ることを言ってしまったみたいだし……ごめんね」

「いえ、悪いのは私の方です。過ぎた事を思い出して勝手に暗くなってしまうって」

遠くで響いた鶯の声と、近くで跳ねた魚の音が心地よい協和を奏でてくれた。麗華の素直な心が、先刻からの私の心の迷いなどには目もくれず、ボートの上で揺れ動いている私の偏狭な心に染み込んできた。

「どこかで休もうよ」

長閑な静寂の中で河口が突然振り向いて大声をだした。

「どこで？」

と、すかさず田山。

「あそこの公園は」

回想の世界から現実に戻された私は顎で示した。

河口と田山は、公園の水道の蛇口を捻って顔をパシャパシャと洗うと、トレーナを脱いでＴシャツ姿になった。私も同様にＴシャツになってから冷たい水で顔を洗った。それぞれ屈伸をしたり腕を回したり、軽く体をほぐしてからベンチやすべり台に横たわった。後一時間程で目的地に着くはずであった。日が高くなるにつれ、春

というより初夏を思わせる気温になってきた。

私は水分補給をしてからベンチに寝そべって空を眺めた。抜けるような青さはあの時の思い出と同じであった。目を閉じて心地よい疲労感に身を任せていると、再び回想の世界へと誘われていった。

新学期が始まった頃の私は、活気と希望に満ち溢れた日々を送っていた。幸いなことに、私と麗華の教室は階段を挟んで隣り合っており、彼女と顔を会わすことも多くなった。毎日学校に行くことが楽しくて仕方なかった。勿論、勉強は嫌いであるが麗華に会うためと部活動をするために通っているようなものであった。

ある朝、私がぼんやりと歩いていると突然、

「おはようございます」

と、爽やかな声を振りまいて麗華が小走りに近寄ってきた。

「ああ、おはよう」

私は動揺を隠すようにわざと静かな口調で答えた。私達は肩を並べて歩いた。途中、教師に出会うつと、私は少々照れ臭い感を覚えたが、麗華は何のためらいもなく、大声で清々しさを振りまいていた。

その日から時々二人で登校するようになり、二人で下校することも珍しくなくなってきた。休憩時間は勿論、掃除の時間であろうと何であろうと、授業と部活動以外の時間は、少しの時間でも一緒に過ごした。一日がとても短く感じられ、毎日が走馬灯のように過ぎ去っていき、いつしか衣替えの季節になった。

麗華には白い制服が実によく似合っていた。ただでさえ明るい笑顔であるのに、淀みのない純白に爽やかな笑顔が映えて、清潔な少女のイメージが強調されていた。

夏休みの話題が出る頃、私達の町で夏祭りが催された。どこの地方にもある小さな夏祭りであったが、みんな楽しみにしていた。中学生位になると、誰と一緒にいくかということが話題の中心になった。

私も麗華を誘いたかったが、春休みに出会ってから急速に二人の

仲が、いや、私の気持ちが急激に惹かれていることに、いささか不安を感じ始めていた。自分独りで恋心を抱いて、最終的に振られるのが怖いようでもあったし、いつしか自分が冷静になって彼女に幻滅するようなことが起きそうで怖くもあった。その上、私は元来雑踏が苦手であり、祭もあまり気が進まなかった。

私が決断を躊躇しているところへ麗華から誘いがあった。単純なもので、誘われてみるとそれまでの迷いなどどこかへ消えてしまつて、素直に行きたいと感じた。

祭りの当日午後七時頃に、いつも登校するときに待ち合わせるお寺の門前で落ち合った。麗華は淡いピンク地の浴衣に明るい黄色の帯をしていてとても可愛かった。何となく気づく程度の薄い化粧と自然の色に近い口紅を引いているようであった。私は、いつもと違う大人びた雰囲気圧倒されて、『可愛い』の一言がさらりと口に出すことができず、

「こんばんは」

とだけ口籠るのが精一杯であった。

彼女も照れくさいのか、少し上気した頬を団扇で隠すようにしてやや潤んだ瞳で細く微笑んだ。そして紅い鼻緒のついた黒い下駄が彼女の背丈をほんの少し高くしていた。私も藍色の浴衣に壞手をして、夏の夕暮れ空に快い下駄の音を響かせていた。

辺りは薄紫色に染まり始めており、あちらこちらから下駄の音が響いてきた。麗華は両方の掌で団扇をぐるりと静かに回しながら、時折私の顔を見上げて笑った。私は幸福感でいっぱいであった。幸福すぎて漠然とした不安を感じるほどであった。独りになった時にはあれこれと心を迷わせているのに、こうして一緒にいると幸せを実感している自分がおかしくて、紅が滲んだ夕空をふいと見上げた。

神社への参道を中心にして、露天が境内まで続いている。あちらこちらから人々が集まってきて、人々の歓声や下駄の音が天に抜けるような活気が湧いていた。

「みんな楽しそうですね」

麗華が独り言のように呟いた。

「そうだね」

夕風に涼むように幸福感を味わっていた私は、彼女の言葉が独り言のようにしか聞こえなかった。だから反射的に思いのこもっていない乾燥した言葉を返してしまった。

「内海さんはお祭りが嫌いですか？」

と、やや不安な表情で麗華が尋ねた。

「嫌いではないけど特に好きでもないな」

と、馬鹿正直に答えてしまった。決して悪気はなかった。私にすれば、麗華と一緒にあれば祭りでも買物でも何でも良かったのだ。ぼんやりと幸せに浸っているときに尋ねられたために、何の思慮もなしに単純な答えを返してしまった。しばらく居心地の悪い沈黙があった後に

「帰りましょうか……」

と、突然、麗華が立ち止まって涙を押し殺したような声で呟いた。

私はとつさに彼女の瞳に振り向いた。少し潤んでいる。軽薄な私には彼女の挙動が全く理解できずにその場に立ちすくんだ。

「無理なお誘いをしてすみませんでした。内海さんがお祭りを好きじゃないとは知らなかったものですから……」

そう言って、俯いたまま小走りに引き返していった。振り向く瞬間に涙が落ちたように映った。私はこの段になってやっと彼女の心の痛みと、自分の軽薄さに気づいて、反射的に彼女を追いかけて腕を捕まえた。そして強引に路地に引き込み、ひたすら謝った。

自分と祭りを歩くために、いつもと違う着飾りを入念にして薄化粧までしてくれているのに、美しさを褒めるどころか無愛想な会話しかできない自分が腹立たしかった。

「なにも私、怒ってなんかいいいです。私が悪いのですから……」

麗華は私の腕から逃れようとしたが私は離さなかった。そして何度も謝罪した。

「内海さんが無理をして下さっているのに有頂天になっていた自分が恥ずかしいです」

彼女の言葉には決して皮肉はなかった。本当に自分を悪く感じているようであった。そんな謙虚な彼女と押し問答していると、ますます自分が腹立たしくなってきた。何とか失言を消し去りたくて、自分でも驚く言葉を吐いてしまった。

「祭りは嫌いでも君は好きだ」

そんな言葉が路地に響いた瞬間、二人は呆然と立ち尽くした。なぜこんな言葉が急に飛び出してきたのか全く解せない。麗華も涙に潤んだ瞳を伏せていた。私は羞恥心で居ても立ってもいられず、その場から逃げるようにして歩みだした。

だが、麗華はまだその場に踏み留まったままである。

「もう一緒に歩いてくれないの？」

私は哀願するように彼女の瞳を見つめた。

「だって下駄が脱げてしまつて……歩けないです」

ちょっと甘えるような笑顔を浮かべているが眼はまだ真っ赤であった。私は彼女の足元を見た。確かに片足で立っている。回りを見渡すと、路地の曲がり角の辺りに、子供の履くような小さな下駄が裏返っていた。

「明日は雨みたいだね」

そう言つて麗華の足元に拾つてきた下駄を置いた。

「ありがとう」

麗華は小さな声で礼を述べると、そつと私の手を握ってきた。私も柔らかに握り返して、そのまま祭りの中へ歩いて行つた。

麗華は、時々露店を覗き込みながらゆつくりと歩いた。彼女は覗く度に、いちいち『きれい』とか『可愛い』とかの印象を洩らしているが、私はいつも、一步離れて彼女の頭越しにちらりと見るだけで、大した興味は示さなかった。しかし、あまり無関心でいると、またさっきのように彼女に気を遣わせるから、適当に相槌を打ちながら聞き流していた。

麗華は綿菓子を買って、嬉しそうな表情で綿を舐めながら歩き始めた。祭りには、浴衣と下駄の音と露店、それに綿菓子が似合うものだと感心した。

私達は、人々の流れに従って川の土手の方へ向かった。間もなく花火が打ち上げられる予定であった。堤防への登り口にひなびた駄菓子屋があつて、酒やら、かき氷やら、つまみの類が無雑作に店の表に置いてあつた。

私はビールを買い、彼女にイチゴのかき氷を買った。そして、人々がたくさん集まっている橋の付近から上流側に少し歩いて、やや人気の少ない場所でベンチに座った。

「いつもビールなんか飲んでいるの？まだ中学生ですよ」

うまそうに咽を鳴らした私の仕草を見て、呆れたように彼女が尋ねた。

「時々ね。親父の晩酌に付き合っているよ」

その時、ドーンという腹に響く爆発音がして、夜空に火の花が開いた。

「わあ、きれい」

麗華は、氷を口に運びかけたまま手を止めて見入っている。足元ではこおろぎが鳴いていた。私も、しばらくはぼんやりと花が散る様子を見つめていたが、ものの五分もすると飽きてきた。時々、彼女の横顔を盗み見たが、あどけない表情は一心に夜空を見上げ、一向に飽きた風もなかった。仕方なく、私ももうしばらく夜空を見上げながら、一体、麗華はさっきの私の言葉をどんな風に受け取っているのだろうか、臆病風に悩まされながら、いろいろな状況を考えていた。しかし同時に、胸につかえていたものを一気に吐き出した後の解放感を感じていたのも事実であつた。

「私、去年の暮れまで付き合っていた人がいたんです」

柳の枝のような火が夜空に流れた。私は無言で彼女の横顔を見つめて、自分の顔が少し硬直していくのを感じた。

「その人とは去年の暮れに喧嘩別れしました。それが、最近手紙を

くれて、もう一度やり直したいって……」

いつもは、恥ずかしくなるほど私の目をじっと見て話す麗華が、ずっと横顔を向けたままでぼつぼつと語った。そして私の脳裏には、春の日差しを身体いっぱい受けながら、草原の上に仰向けになって白い雲を数えていた謎めいた女の横顔が今の彼女に重なった。

「君の気持ちはどうなの？」

私は狼狽の中で冷静を装って尋ねた。

「どうでしょうか……」

ひととき大きな花輪が夜空に開いた。その火花が消えていく瞬間に、私は冷え冷えとした悪寒に似た冷たい流れが、背筋を伝い降りていくのを感じた。

麗華はずっと昔の彼氏を心に引きずっていたのだろうか？ 出会ってからつい数十秒前までの二人の幸福な期間は何であったのか？ 過去の男に未練を持ちながら、私と恋人に近い接し方ができる、そんな女の姿を垣間見てしまったように全身に緊張が走った。

「まあ、自分の気持치가良くわからないなんてことは、誰にでもあることだから」

私は混乱する心を整理できずに、中途半端な言葉を発することしか叶わなかった。

私は、麗華も私と同程度の想いを抱いているものと、潜在的に確信していたことに今はつきり気づいた。だから、さっき興奮した折につい本音を口にしてしまったのだ。本心を伝えれば彼女も明確に私に都合の良い意思表示をしてくれるものと、無意識の内に期待していた。

それが、告白した後に敢えてこんな相談を持ち出すということは、これが即ち回答であるように思えた。少なくとも、私がこれ以上接近することを拒んでいると感じた。そうでなければ、こんな相談は持ち出さない。例えば迷ってはいても、少しでも私の告白を受ける気持ちがあるのなら、今のタイミングでは、こんな相談は心にしまっておくのが通常の心理であろう。

私は花火が数発開花する間にここまで結論づけた。先ほどの悪寒が頬まで走った後、心にずっしりと落胆の塊が沈んでいった。

一瞬、路地で吐露してしまった言葉をここで繰り返し、彼女に再会を断わるよう強引に迫ることも考えたが、余計に彼女に負担をかける……いや、余計に自分が惨めになる恐ろしさから、妙に大人ぶった態度を示してしまった。

「彼のことだけを考えて、自分の気持ちを測ってみれば？余計なこととは考えずに自分の正直な気持ちに耳を傾けて、もし、まだ好きならやり直してみればいい。それで嫌になったらまた喧嘩別れすればいい。俺達はまだ若いし、失敗はいろいろあつて当然だと思うよ」まるで、路地での告白など全く夢の中の出来事であつたかの如く、あくまでも私は第三者の立場で話した。麗華は、私に当事者になることを望んでいるようにも思えた。或いは、試しているのかもしれないといった疑念も湧いた。だが、私には勇気がなかった。麗華を傷つけることも、自分が傷つくことも承知の上で、再度気持ちをぶつける勇気はなかった。

「わかりました。ゆっくり考えてみます」

麗華はいつもの明るさを取り戻して、闇の中でほのぼのと浮かび上がるような笑顔を灯した。私は、すべてが終わつたように実感した。女が覚悟を決めた時に浮かべる胆の据わつた笑顔であつた。

そして、私の心は消沈した。色々な憶測や仮定で判断しないで、目の前にいる麗華と心を開いて話していれば、この後の辛い思いも、もう少し和らいでいたのかも知れなかった。

私は恋愛以外のことで、納得いくまで心を開いて話すことは何の躊躇もなく行うが、なぜか恋愛自体が苦手で、恋愛などに自分が囚われていること自体が腹立たしくもあり、好きだの恋だのという世界に関わっている自分を認めたくないもう一人の自分がいた。

『やっぱりこうなるのか』と私は心の中でつぶやいて、大きく伸びをした。しかしそれは哀愁だけではなく、予想通りに落ち着くところに落ち着いたという安堵感も同居した感情の発現であつた。

私は立ち上がったから麗華を見下ろし、今後は、今までのような近しい距離ではなく、通常の友人程度の距離感を保とうという決意を語気に含めながら、

「そろそろ帰ろうか？」

と、今夜の出来事すべてを水に流してしまうように明るい声を掛けた。

「ええ」

と、麗華も立ち上がった刹那、大きな歓声が川下の方から湧き上がって、夜空には最後のファイナーレが飾られた。

私が路地で計らず吐露した本心の言霊も、火の花が散るほどの短い時間夜空をさ迷っただけで、音もなく消え去ってしまった。

冷たい風（前書き）

松山千春さんの「時のいたずら」「木枯らしにふかれて」「炎」を
小さな音で聞きながら読んで頂いたら幸いです。

冷たい風

二 冷たい風

私達三人は半時間ほど、淡路島のある町中をさ迷った。目的地には辿り着いたのだが宿が見つからなかった。公共の宿とはいえ、中学生が一週間も滞在できる程の所だから立派な建物であることは期待していなかったが、あまり貧弱な建屋も嫌だと思った。

近くを通りかかった女子学生に尋ねてみると親切に教えてくれた。彼女の指示通りに行くと、漁港の辺に予想通りの、どう見てもちよっと大きな民家としか言い様がない古い木造の建屋があった。左右に開く大きな木戸を開けてみると、中はがらんとして薄暗い静寂があった。

何度か声を掛けると漸く奥から若い女性が出てきて部屋に案内された。玄関から真直に板を敷き詰めた廊下があり、歩を進める毎に板のきしむ音がしたが決して不愉快な音ではなく、むしろ家の歴史を感じさせるものであった。中は薄暗く、壁や天井も煤けて見えたが不潔感はなかった。

私達は畳みの部屋で横になって少し休んだが、すぐに回復してじっとしていられなくなってきた。夕食までまだ時間があるので私達はこの街を散策してみることにした。

宿を出るとまず目に付くのは、小さな漁港とその漁港と瀬戸内海とに境界線を引く防波堤である。そしてその防波堤の先端には赤い灯台があった。波の静かな港内を白い鷗が自由奔放に餌を漁っていた。彼らは、ほんの一瞬海面に身を浮かして頭を海中に突っ込む。そして次の瞬間には白い羽根をあざやかに振って舞い上がる。海を見慣れぬ私にはまるで曲芸士のようにであった。

細長い堤防の上を灯台へ向かって歩いて行くと、数人の小学生が釣りをしていた。海面に目を凝らすと小魚がきらきらと泳いでいる。

一人の小学生が竿を振り上げると糸の先端にきらきらと光るものが食らい付いていた。彼が竿をぐるりと横振りにして先端についた魚を灯台の壁に叩き付けると、見事に魚が針から外れた。

灯台の壁から滑り落ちた魚は白い腹を大きく膨らませて怒っているようであったが、少年もまた、しまふぐが嫌いなようで、そのふくれた腹を海の中へ蹴り飛ばした。だが海へ戻されたしまふぐは元氣良く泳いで行った。

河口と田山は、子供達に針と糸をわけてもらって、テトラポットの隙間に住む小魚を釣り始めた。私はあまり釣りをする気分にはなれなかったので二人に混じろうとはしなかった。決して釣りが嫌いではないのだが、彼らのように餌も着けずに釣ろうなどという図々しい気分にはなれなかった。

それよりも広大な海を望み、潮の香りをいっぱいに含んだ海風を全身で受け止めている方が心地良かった。ついさっきまで青を呈していた空がどんよりとした雲に覆われてきた。少し風が強まって海面が小刻みに揺れ始めている。辺りがやや不気味に薄暗くなって風が肌寒く感じ始めた。大自然の壮大な勇姿を見せつけていた海が、にわかにその寂しさを海面いっぱいに含んで、哀愁を波に包んだまま私の胸に押し寄せて来た。そしてテトラポットに吸収される、波の単調なリズムが過去の辛い思い出の中へと私を導いていった。

夏休みに入り、私達バスケット部は八月に行なわれる最後の大会を目標に、毎日厳しい練習に励んでいた。休みに入ってからまだ一度も麗華には会っていない。彼女は部活動にも出ていないというので直子に尋ねてみたところ、バトミントン部を退部したらしいが、誰も明確な理由を知らなかった。彼女の家に電話でも掛けてみようかと思ったが、祭りの夜に、通常の友人でいようと決意したこともあって自制した。それで結局、休み中には一度も彼女に会うことはなかった。会いたくないと言えば嘘になるが、忘れようと努めた。部活動の練習に打ち込むことで気が紛れたのもまた事実であった。

新学期に入った初日、私は複雑な気持ちで登校した。友人としても麗華と会えることは、やはり、正直なところとても嬉しかったが、昔の彼氏とやり直しているかどうか、事実を知ることが怖くもあった。麗華に対する恋慕は捨てようと休み中に努めてきたこともあり、自分の感覚ではかなり平静に戻ったと感じてはいるが、それでも折節、祭りの夜のことを思い出す度、やはりもつと話し合うべきだったとか、自分に有利な助言をしていたらどんな展開になっていたのだろうかと考えてしまうこともあった。

まあ、それも時間の問題だと自分に言い聞かせ、麗華に彼氏ができたところで友人としての付き合いがあれば、それはそれで自分の望む一つの形かも知れないと自身を納得させていた。

そんな感覚でいた私に、頭から冷水を浴びせ掛けられるような出来事が起こった。私が教室を移動するために廊下を歩いていると、向かいから女性が三人で歩いて来た。その中に麗華も混じっていた。久しぶりに彼女の姿を見て、やはり胸が鼓動した。あれこれと頭の中で制御してはいても、実際に目の当たりにすると熱い血流が全身を駆け巡った。それで、極力さりとした態度で挨拶を交わそうと脳裏で言葉を探しながら歩を進めた。そして、彼女がいつものように明るい笑顔を浮かべて、新鮮な挨拶を交わしてくれることを当然のように期待した。

私も彼女も若干の照れ臭さを感じて、伏し目気味に歩き、互いが近づいた時に視線を合わせた。私は軽く笑顔を浮かべて「久しぶり」

と、声を掛けようとしたその刹那、彼女はすぐに友人の方へ視線を向けて話し始めた。完全に無視された。微笑みも会釈もない完璧なまでの無視であった。私は全身から血の気が引いて、顔が青ざめるのを実感した。と同時に、振り向けた笑顔を送る先がなくて穴にでも逃げ込みたいような羞恥を覚えた。そしてその態度こそが、私が一番尋ねたかった内容に対する返事であると受け取った。

それからというもの、彼女と会う度に悉く無視された。時折、階段や廊下で一对一ですれ違うような時だけは、さすがに彼女も会釈くらいはしてくれた。しかし、それは俯いたままでほんのわずか頭を下げるだけの冷たいものであり、むしろ知らない振りでもしてくれる方がましであった。

私には麗華に無視される理由が全くわからなかった。彼氏と仲良くするために私と友達でいる事が障害となるとは考えにくかった。まして挨拶もできない位、私が邪魔であるとは全く理解できなかった。もしかしたら、その彼氏がほんの数ヶ月の私と麗華の関係を知っていて、拘っているのであろっか。

あれこれと推測はしてみるものの、麗華に直接話しをして確かめる勇氣もなく、そんな事はどうでも良いと自分に言い聞かすしかなかった。

夏休みの最後の大会終了と共に私はバスケット部を引退した。今まで学校での楽しみと言えば、バスケットをやることぐらいしかなかった私は、麗華との会話まで失ってしまい、他に何も楽しみとするものが無くなってしまった。

三年生になってからというもの、自分のクラスのことなどはお構いなしで、麗華や彼女の友達たち、そしてバスケット部の連中とばかり仲良くしていたために、今さらクラスの連中と深く付き合おうにも、どうしても他の連中からは浮いた存在になってしまっていた。さりとて、他のクラスにいる部活の連中の所へ遊びに行ったところで、彼らにはそれぞれ各クラスでの顔を持っており、部活の時とは異なる雰囲気で振る舞っているから、そんな所へ私が顔を出したところで面白くはなかった。

そうやってどこの輪にも入り込めない私は、放課後の校舎を目的も無くぶらついていた。或いは、麗華に出会える事を潜在的に期待していたのかも知れない。会えばまた無視されて辛い思いをすると知りながら……。

残暑も次第に和らぎ、黄褐色や紅葉色に色づいた木の葉が時折風

に吹かれて散っていく季節となった。思い返ればもう三ヶ月も麗華とは断絶していた。通常であれば、三ヶ月も会話がなければ仲良く過ごした昔の出来事も、いい思い出として処理できているはずであるが、なぜだかいつまで経っても麗華の思い出に対しては魂が抜け切れず、いつまでも熱い感情を伴って思い出されてしまうのであった。そして、彼女との無の時間が長引くにつれて、却って自分の中で麗華への夢想的な恋慕が膨らみつつあった。だが、彼女はそんな私の心など知る由もなく、彼女にとっては自然な振る舞いが、私の心を完膚なきまでに痛めつけた。

ある、秋にしては寒い日の放課後、適当に教室で時間を過ごしてから帰宅しようとして廊下に出た時、もう人影は少なかったが、向うから二人の女性が歩いてきた。私は一瞬、二人を見つめたがすぐに俯いてしまった。麗華と直子であった。私は廊下の隅を窓の外を見ながら歩いた。できるならば、二人にどこかの教室に入ってもらいたかったが、愚かな私は直子が一緒にいることで、もしかすると挨拶くらい気持ち良く交わせるかも知れないといった、浅はかな希望を捨ててはいなかった。

二人が私の数メートル先に近づいたとき、麗華が立ち止まって窓を開け、身を乗り出して、あの私の魂を熱く引き寄せた明るく弾んだ声で

「大崎君！」

と叫び、私の脳裏から離れないあの清らかな笑顔を満面に湛えて手を振った。またしても冷水を浴びたようなショックを受けたが、雑草が踏みつけられても頭をもたげる様にすぐに冷静になった。もう一度彼女の笑顔を見直したが、よく見ると以前の清潔さはあせているようにも見えた。きつと大崎というのが彼氏の名前なのかも知れないが興味はなかった。

私は、彼女らを避けて無言で通った。直子が立場なさそうに瞳でちらりと会釈した。私も同様にして微笑みかけたが笑顔になりきらずに途中で止めた。

歩きながら幾度もあの麗華の姿が思い浮かんできたが、もう苦笑するだけで別段立腹はしなかった。脱力感だけが私を支配していた。確かに麗華にあんな態度を取られると悲しくなるが、その頃の私は、そのような悲しい状態が普通の状態になりつつあった。だから改めて悲しい心の波に胸が締め上げられるような痛みは起こらなかった。実は、その日は二学期の中間試験の結果も出ていた。高校入試に直結する試験であるだけに、その虚しい結果は重く心にのし掛かっていた。こんな成績では志望校には絶対合格しないと、教師に保証された。自分では、精一杯努力した積りであっただけに落ち込みも大きかった。

その頃の私は何かしら運勢の下降期とでも言うのか、やること成すことすべてが悪い方に結果が出た。そして、意識すればするほどすべてを悲観的に見るから、益々悪い結果を呼んでしまう。悪い結果が出ればまた下降していることを意識する、そんな悪循環に入っていた。たまに良い結果が出たり、楽しい事が起きたりすると得体の知れない不安感に脅かされて、むしろ悪い結果が出た方が安堵するような精神状態に陥っていた。

まるで精神衰弱者のように日々を過ごしていた。何をするにもやる気が起きず、何を言われても怒りもせず、喜びもせず、笑いも少なかった。だから麗華に冷たくされてもそれが当たり前前の出来事であり別段悲しいとも感じなくなっていた。

中間試験の二週間後に実力試験というものがあった。一週間程は何もやる気が起きずにぼんやりと過ごしていたが、その一週間の間、心境が変化してきた。自分が、麗華に惚れているということをはっきりと認めたのであった。それまでは、走ろうとする自分の恋心を抑制するのに必死であった。抑制する努力をしている間は、まだ走っていないと安心していただけだが、冷静に省みるともう既に気持ちには究極に高まっており、既に自分は失恋しているという事実、そしてその失恋のために心が強く打ちひしがれて、受験勉強も手につかないのだということに気がついた。

そんな自分に出会ったとき、失恋の一つや二つのために人生を左右する大切な受験勉強に身が入らないとは何とも情けない限りであると、もう一人の冷静な自分が嘆いていた。

そう悟った日の夜から、私は死に物狂いで勉強した。まるで失恋の鬱憤を晴らすように自暴自棄とも言えるような無謀な勉強をした。毎日の睡眠時間が五時間、四時間、三時間と段々短くなり、机に向かう時間が長くなっていった。睡眠不足のため、朝は眼が痛く、階段を降りるときには振動で頭痛がした。朝食時にコーヒーを手に持ったまま眠ってしまった、熱いコーヒーを零すこともしばしばあった。

決して効率の良い学習方法ではなかったが、そうやって無茶をやることで、虚しい気持ちを誤魔化せるのであった。一週間、二週間と辛い日々が続いたが根気強く頑張った。次第に、机に向かっているときには麗華のことは考えなくなってきた。考えるというよりも美しい過去の映像が折節脳裏に閃くだけであった。だが学校では嫌でも目に映った。そして何かの偶然で出会つとやはり無視された。次第に彼女に出会うことが辛くなり、できる限り避けるよう努めた。ただ遠くから気づかれぬように彼女の明るい素振りを眺めることしかできなくなっていた。

日ごと寒さを実感し、私の大嫌いな冬が近づいて来た。重い頭を抱え、鉛のようにずしりと沈んだ心で、勉強のこののみを考えて暮らした。睡眠不足、運動不足、試験、そして麗華。私の精神状態はほとんど発狂寸前であった。

やがて実力考査が始まり、すべての力を出し切ったが結果は最低記録を更新してしまった。私は悔しさに豪を煮やししながら、二週間後に行なわれる次の実力考査に向かって勉強を始めた。何としてでも次の考査で成績を上げなければ、第一志望校はおるか第二志望校も危なかった。

私は前にも増して机の前に座る時間を増やし、歩きながらも、トイレの中でも頭に知識を詰め込んだ。そうして迎えた実力考査であ

ったが結果は前回よりも悪かった。クラスの連中は結果をもらって一喜一憂していたが、私は全く無反応で誰とも口を利かずにさつさと帰宅した。

家には誰もいなかった。持っていた鞆を床に叩き付けた瞬間に私の心は爆発した。手当たり次第に物を壁に投げ付けて壊した。本棚に並んだ教科書や参考書を手当たり次第に掴んで壁に投げつけた。何度も繰り返し勉強した参考書はすべてのページをずたずたに引き裂いた。どんなに努力してもどんなに勉強しても駄目なものは駄目なのだ。涙が滝のように流れ落ちる。自分自身が余りにも情けなかった。もうどうでもよかった。志望校に入れなくても、麗華に嫌われても関係なかった。何ひとつ勝ち取れない自分などこの世に存在する価値など無かった。息をして、飯を食って、のうのうと生きていることすら許されなかった。自分が惨めで、情けなくて、嗚咽した。頭を壁にぶつけて死のうとした。窓ガラスに頭から突っ込んで死のうとした。だが、そんなことで死ねるのか不安であった。中途半端な怪我は却って親に迷惑を掛けてしまうと、意外に冷静な判断もしていた。机の上に飾っていた、麗華たちと一緒にサイクリングに行ったときの集合写真を写真ケースごと手に取り、壁に投げつけようとして助走したときに、床に散乱した参考書に足が滑って前のめりに倒れた。私はそのまま床に伏せ、家中が振動する勢いで床を叩き続けた。涙が枯れることなく流れ続けた。嗚咽が大声に変わり、悔しいと叫び続けた。だが、日々数時間しか眠っていなかった私は、どんなに怒ってはいても、身体が横たわる安楽には勝てず、そのまま睡眠の誘惑へと誘われていった。

さて、どれほど時間がたったのだろうか、深い眠りから目覚めた私は、もう薄暗くなってしまった部屋のの中を見渡した。日暮れである。辺りを静寂が包んでいた。もう涙はすっかり乾いている。まるで狐につままれたような気分で、散らかった部屋の様子を眺めている。誰がこんなに散らかしたのか……。

すっかり気持ちは落ち着いていた。しかし、目の前に立ちはだか

っている壁の大きさは微塵も変わりはしていなかった。その壁は依然として気が遠くなりそうな高さから、足元で泣きわめいている私を見下ろして嘲笑っていた。

努力すればするほど成績は下がっていく。それは今のところ事実であった。それゆえ、苦しい努力をしてまで成績を下げる必要はないであろうと、錯覚から生まれる感情が理屈を言う。

私は時々、弱気になった時にはそんな誘惑に惑わされたが、同時に敗北感が私を襲った。私は負けるのが大嫌いであった。私は神や仏に対する特別の信心は持たないが、人間の運命を操っている何かは存在すると思う。それが広義の意味で信心ということなのかも知れないが深く考えたことはない。ただ、その何かが私を苦しめ、挫けさせ、絶望の極地へ追い込もうとしている。そんな何かに負けることが悔しかった。

私はゆっくりと立ち上がった。何となく誰かに試されているような気がしてならなかった。もう高校入試はどうでも良くなってきた。それよりも私を試している奴に意地を見せてやりたくなった。結果よりも、精一杯の抵抗を示さなければカスの男で終わってしまう……。そう考えると再び闘志が湧いてきた。

私は再び猛勉強を始めた。麗華に出会っても、もう左程心は動揺しなくなってきた。まるでテレビ画面の向こう側にいる女優を見つめているかのように、現物の麗華の实在感がなくなっていた。ただ、ぼんやりと心にフィルターをかけて見つめることしかできなかった。麗華に気づかれずに見ていられることの方が幸福であった。

数週間後に期末考査が行なわれ、間もなく結果が出た。第一志望校を受験できるほどの成績が収められた。それは大きな自信に繋がりを、その後も猛勉強を続ける勇気を与えてくれた。

やがて春が訪れて卒業が迫ってきた頃、三年生たちは誰しも日が暮る毎に離別を意識し始めた。友人たちにもより親しみが感じられ、それまで左程仲良くしていなかった連中とも親しく言葉を交わすよ

うになっていた。みんな残された時間を精一杯楽しく過ごそうとしていた。教室の中は受験前だというのに穏やかな空気と、わざとらしくさえ思える笑いが耐えなかった。

不思議なことに、その頃になると麗華の態度にも変化が現われ始めた。別れが近くなったために、最後くらいは礼儀正しく別れようという心理が働いたのか、彼との仲が安定して、私の存在など影響しなくなったのか理由は不明であるが、私を避けることが少なくなり、出会った頃のように気持ち良く挨拶もしてくれた。それはわざとらしいくらい清々しい振る舞いと笑顔であったが、私には空虚しか伝わらなかった。まるで、二人の間には夏も秋も冬もなく、春だけが存在するかのようであった。

だが、そのころの私にはもう左程の感動はなかった。確かに嬉しい気持ちは否めないがすべて遅すぎた。時間の経過に対する苛立ちが増すばかりである。恐らく、卒業生みんなが同じような心情であったのだろう。みんな、最後に何かやりたそうであった。いや、率直に言って時間を止めたかった。それが叶わないから、この時間を楽しむために行動したかった。だが、受験を控えて時間のない中で出来る事と言えば、平々凡々と何の変化もなく今までと同じ日々を過ごすしかなかった。

そんなある日の放課後、廊下で私と直子が話しているところへ麗華がやって来た。今までなら全く無視して横をすり抜けて行くはずだったのに、笑顔を満面に浮かべて私の方へ向かって来た。彼女は両手を絵の具で真赤に染めている。

「ほら、真赤でしょう!」

そう言っただけで両方の手のひらを私の顔に向けてから、私の手を握り締めた。私は突然の彼女の行為に面食らった。

「バカ」

私はそう言っただけで精一杯であった。彼女が離れた跡には、絵の具がべったりと付着していた。

「顔に塗るぞ!」

と、苦し紛れに発した私の言葉に彼女は無反応であった。できるものならやってみると言わんばかりの態度であった。言葉だけで何もできない男を嘲笑っているかのようなのであった。

私は黙って手洗い場に行った。なかなか洗い落とせずに困っているところへ直子が石鹸を持って来てくれた。

「少し変わったね、彼女」

私は手を擦りながら尋ねた。

「ええ、随分……」

「いつ頃からあんな風になったの？」

「さあ、良くわからないけど、最近は特に女子生徒の中でも評判良くないの。何でもはつきり言っし、刺々しくなった感じかなあ。前はあんなに人気者だったのに」

「まあ、仕方ないか、みんな変わるのだから……。俺も君も」

私は直子に差し出されたハンカチを丁寧に断って、自分の汚れたハンカチを取出した。私は手を拭いながら直子は綺麗になったなあ実感した。

卒業式も終わり入試の合格発表も終わった。幸い私は第一志望校に合格した。正直言って安堵はしたが喜びは余り湧かなかった。あんなに苦しんだが、乗り越えて当り前の壁であると思いたかった。

合格発表を確認した後学校へ報告に行った。みんな嬉しそうに集まって喜び合っていたが、なぜか私は陽気になれなくて独りで桜並木の広場へ歩いていった。まだ桜は蕾の状態で、梅の花が大分散っていた。陽気になれないのは、バスケット部のメンバーが一人不合格だったからなのかも知れない。

「おめでとうございます。合格されたのですよ？」

卒然、背後から麗華の声がした。何のわだかまりも無い、ややハスキーで陽気のこもった清純な声であった。桜の蕾を見上げていた私は、一年前に初めて麗華の声を聞いた時の様に脳裏を刺激されて、はっと後ろを振り向いた。振り向く瞬間に桜の蕾は春の柔らかな日

差しを受けて満開となり、春風に吹かれて花吹雪となり、その花びらが初夏の日差しに白く輝いた後、枯葉の積もった冷たい地面に舞い降りて行った。そうして再び麗華の肩に桜が舞い降りたようであった。彼女はとても嬉しそうに微笑んでいた。

「ありがとう」

私のことを気に掛けてくれたことが嬉しかったし、わざわざここまで来てくれたことも嬉しかった。だが、それだけであつた。笑顔も浮かばなかった。余りに形式的で簡素な別れ方であつたが、彼女がそれを求めていることは実感していた。最後なのだからきちんと礼を尽くす。だが、ここで思い出話をすることや、これからのことを話す積りなど一切ないと言つた空気を実感していた。別れ間際になつて、急に礼儀正しくなつた行動や言動もそれを如実に物語っていた。私は無理に作り笑顔を浮かべてから、

「さようなら」

と、一言残してその場を去っていった。私と麗華の間を優しい風が通り抜けて、二人の間のわずかな淡い思い出をさらっていった。

不可解

三 不可解

「おい。やったぞ！」

数十メートルほど向こうから河口と田山が釣糸の先に小魚をぶら下げて小走りに近寄ってきた。

「まさか。本当に釣ったのか？」

餌もないのに釣られるお人好しの魚がいよつとは信じられない。しかしよく見ると針は魚の胴体に引っ掛かっている。

「うまく引っ掛けたなあ」

「三十分かったよ」

河口が笑いながら言った。

「でも河口に引っ掛けられるとは、にぶい魚だなあ」

「俺にここで出会うとは、こいつも運の悪い奴だ」

河口はそう言うと言針をはずして海へ放り投げた。

「もう餌のない針に引っ掛かるなよ！」

田山が海に向かって叫んだ。

「大丈夫だよ、餌も付けずに釣りをする人なんていないから」

私の言葉に三人は笑いながら、ぶらぶらと宿の方へ歩いて行った。

河口と田山は宿に戻って風呂に入ろうと言い出した。しかし、私はもう少しこの街を探索したくて独りで歩くことにした。

街とは言っても、片側一車線の道をはさんで小さな食料品店や酒屋が数件並んでいるだけで、人気も少なかった。山手側に神社があり、神社の中にある公園で子供達が遊んでいる。その公園の隣に学校の校舎があった。学校の裏は小さな丘になっており、キャンプ場の看板が見えたので登ってみた。

坂は急であつたが十分と掛からずにキャンプ場にたどり着いた。突然開けた展望に私は絶句した。とても見晴らしが良い。海に浮か

ぶ漁船の動きが手に取るようにわかった。海岸通りが島の果てまで伸びている。

私はキャンプ場の海側にある展望台のベンチに座り込んで、海原を眺めていた。そこへ年配の女性が近づいてきて私に色々と話しかけてきた。このキャンプ場の管理人らしい。

この丘は昔、鰯の集団を発見する見張り台であつたらしい。北向かいにある、この丘と同じくらいの高さの丘に信号を送り、その丘から麓にある漁港に連絡する。すると小さな漁船団が出港する。その漁船団に対して、この丘から指示を出す。

無線も電話もない時代にどうやって適確な指示を与えたのか。その時代には今ほど人は住んでいなかったであろう。この辺りは小さな漁村だったに違いない。学校の授業ではこんな小さな町の歴史は学ばない。しかしこの土地にも歴史はある。昔、漁港は今あるところよりもずっと北の方にあつたそうだ。今の港はまだ新しい。そしてその影響で海岸線が自然の反作用で削り取られたとか。

東のほうには丘陵地帯が広がっていた。様々な形をした段々畑が小刻みに並んでいる。少しでも耕地を確保するための器用なまでの造作であつた。

土地の歴史話を聞いてすっかり旅行者気分になつた私には、ゆっくり沈んでいく夕陽がいつも見ている夕陽とは違うもののように思えてきた。そして夕陽は今日最後の輝きを放っていたが太陽もまた疲れているように思えた。きれいに澄んだ静寂の微風が私の胸いっぱいに染み込んで来た。私は何となく疲れていた。身体的には健康そのものだが精神的には深く沈んでいる。

この一年間、二つの戦いをしてきた。一つは受験。これは確かに合格という言葉で飾られ、一応は受験戦争に勝った。もう一つは麗華のことだった。彼女には完全に嫌われてしまった。こちらは完敗である。もう戦うのは嫌だった。これから先もつと厳しい競争をしなければならぬのに、もうそんな闘志は湧いて来なかった。とにかく一週間ゆっくり心を癒したかった。河口は一週間かけてこの辺

りの風景画を描くそうだ。田山は写真を撮るつもりだ。私は何もする積りは無かった。

日も暮れそうになったので、立ち上がりとしたその時、突然後ろの方から聞き覚えのある美しい声が響いた。

「あのう、すみません」

辺りの山々に澄み渡りそうな美しさ。私はまさかと思って振り向いたが、驚きのあまり声を詰まらせてしまった。とても信じられない光景であった。こんな所に麗華が居ようとは、どうして想像がつくだろうか……。一瞬にして身体中が熱いものに覆われた。

「ど、どうしてこんな所に……」

と、私は戸惑った。

「療養です」

「療養？」

「ええ、私、肺の病気になってしまつて。大したことはないのですが、少しでも空気のきれいな所にいる方が早く良くなるって言われたものですから。ちょうどここに親戚があるもので……」

麗華も舞い上がっているのか、別段聞いてもない詳細な事情まで一気に説明してくれた。

「病気？知らなかったなあ。それでバトミントンも辞めちゃったのか」

「ええ、ところで内海さんは何をしにいらしたの？」

「俺はサイクリング」

「好きですね、サイクリングが」

「まあね」

「独りで、ですか？」

「いや、田山と河口も一緒だよ」

「宿はどこですか？」

「あそこの古い建物」

私は遠くに小さく見える黒壁の建物を示した。

「私はあの丘の上の白い建物にいます。叔母さんの経営している旅

館です」

「ほう、旅館だったのかあは……」

「失礼ね。この辺りじゃ有名な老舗の高級旅館なんですよ」

彼女は私の横に腰掛けた。この奇跡に近い現実を素直に受け入れたのか、落ち着いた様子が漂ってきた。

「いつまでいらっしゃるの？」

「一週間の予定だけど」

しばらく沈黙が続いた。西の空に筋状に走っている雲が真っ赤に輝いている。そして、その隙間から漏れて来る光線が私たちの横顔を柔らかく照らしていた。

私は、夕陽を見つめるといろんな情感を抱いた。特に真冬の苦しかった時期においては、夕陽は哀愁感しか与えてくれなかった。その苦しみの感覚が今、微かに蘇ってきた。当時の悩みの一つであった麗華が今、私の横に居る。この事だけでも全く天と地の差である。しかし、こんな風にいとも簡単に態度を変化させることが出来るものなのかと、まだ彼女の振舞いを猜疑の心で観ていた。あれ程、完膚なきまで私を徹底的に避けて無視してきたのに、今は馴れ馴れしく私の傍に座り込み、まるで何も無かったかのように振舞っている彼女が別人のようでもあった。

私は心のどこかで彼女を侮蔑した。彼女の言動の一つ一つが空虚なものに感じられた。しかしながら、やはり喜びの感情を抑えることはできなかった。

「もし宜しければ私の所へ来ませんか？」

「……」

「叔母の所で一緒に過ごしませんか？こんな静かな所に独りでいると退屈してしまつて……。それとも、ご都合悪いですか？」

「いや、別に。正直言つて俺も暇だけど」

「それなら是非。部屋もたくさん空いているし、部屋代も要りませんよ、叔母さんは私の頼みなら何でも聞いてくれますから」
なぜか彼女は一瞬寂しそうな表情を浮かべた。

「どうかした？」

私は不思議そうに尋ねた。

「いえ、別に。とにかく今晚来て下さいね」

「今晚？明日からでもいいじゃないか」

私は今夜、奴らと酒を飲むのを楽しみにしていた。

「お願いですから……」

と、悲痛な語気で必死に見つめられた私は、彼女の不思議な態度に困惑しながらも頷いた。

私が宿に戻ると、田山はカメラの手入れをしていた。河口は横になってマンガを読んでいるが、紙包みが置いてあって、ウイスキーの調達は終わっているようだった。

「どこまで行っていた？」

「キャンプ場。でもどこにあるかわからないだろう」

私は事情を話した。私は彼らに、麗華に無視されたり、避けられたりしていたことは一度も話したことはなかった。彼らは、春に知り合ってから、ずっと私たちの良い関係が続いているものと思っていた。

もしかすると、河口は直子から状況を聞いていたかも知れないが、彼は一切話題にはしなかった。

「どうせお前は暇だから、どこへでも行けばいいよ。俺達は明日からあちこちへ出掛けるから、丁度いいじゃないか」

「でも、どうしてこんなに急ぐのかなあ、折角、今夜はお前達と飲むのを楽しみにしていたのに……」

「酒くらい何時でも飲めるだろう。好きな女と旅行気分なんてなかなか体験できるものじゃないよ。少しでも早いに越したことは無いってことだよ」

河口の解説は尤もだと思ったが、私には彼女の悲痛な表情が何とかなしに気掛かりであった。

私が彼らと別離を告げて、旅館の前で不案内に往生していると、

「内海さん」

彼女の美しく澄み通った声が上から降ってきた。麗華が五階の窓から手を振っている。別に数えたわけではないのに五階であることは記憶された。

旅館の仲居さんが出て来て私を案内してくれた。彼女の叔母さんに挨拶してから案内された五階の部屋へ向かった。麗華が廊下で迎えてくれた。

部屋に入ると、八畳ほどの和室が二つ東西に並んでいる。西の端には細い板の間があり、ベランダに続いていた。そのベランダからは遠く海の漁火が見渡せる。

「いい部屋だなあ。こんなに素敵な部屋を使わせてもらって本当に良いのかなあ。ところで君の部屋はどこ？」

「ここよ」

「なんだ。じゃあ俺の部屋は？」

「ここよ」

彼女は平然と答えた。

「構わないの？」

「別に問題ありませんよ。それとも何かするつもりですか？」

麗華は少し意地悪な微笑を浮かべている。私は反応に困って何も言わなかった。

「嘘ですよ。がっかりした？」

と、いたずらばい笑顔を浮かべて私の瞳を伺った。

「寝るときは向かいの小部屋に寝ますよ。叔母さんがうるさくて」

「それが普通だろ」

私は動揺を見抜かれないように、ぶっきらぼうに言葉を流した。

間もなく仲居さんが夕食を運んで来てくれた。二人は小さなお膳を向かい合わせて食事を摂った。

「おいしいですね」

私は彼女の言葉に頷いただけで特に何も言わなかった。とても空腹

だったので食べることに集中していた。その後も時々彼女が何か話していたが、私は空腹を満たすのに執心して、あまり言葉を発しなかった。ただ麗華の朗らかな笑顔だけが印象に残っていた。

食後、ベランダに出てみた。もうすっかり闇に包まれている。真つ暗な海に漁火がぼつりぼつりと浮かんでいた。一定の間隔をおいてちらりと光る灯台の灯り。帯状に並ぶ数多の灯りで本島の海岸線が浮かび上がっている。夜空には掃き集めても集めきれない程の多くの星たちが張り付いていた。

「空と海が同じ色ですね」

麗華が無邪気な驚きを表した。

「違うよ」

彼女は私の言葉を聞いて不可解な表情を浮かべた。

「勉強のし過ぎで目を悪くされました？」

「海には底がある」

「当たり前でしょ？」

「空には屋根がない」

二人はしばし沈黙した。

「私は限りのあるほうが好きですね」

麗華の前髪が静かに風に揺れた。

「俺は無限の方が好きだなあ」

「なぜ？」

「だって夢がある」

「いいですね、将来のある人は……」

「老人みたいな言い方するなよ。少なくとも君は俺より若いのだから」

「私も来年は受験ですからねえ。将来なんて気分じゃないですよ」
「なる程。でもみんな通る道だ。案外大したことはないよ」

私は、惨めにあえぎ苦しんだ体験をこんな言葉で浄化しようとした。
「いつかも一緒に星を眺めましたね」

麗華が語調と共に話題を変えた。

「いつ？」

「記憶力悪いですね」

「どうしてかなあ」

「それでよく志望校に合格しましたね」

「我ながら奇跡だよ」

「毎日何を考えて生きているのですか？大切な時間なのに」

「そんなに怒らなくても良いだろう……」

だが、彼女はじっとベランダから見下ろしたまま沈黙を守っている。

『本当に星は瞬きするのだなあ』

私は余りに数多の星数を数えあぐねて心で呟いた後、

「何だかとてもきつくなつたね」

と、思い切つて積年の疑問をぶつけてみた。

「あなたが甘いのよ」

「甘い？」

「もつと真剣に生きて下さい」

「みんなこんなものだと思うけどなあ」

「後で後悔しますよ」

「ご忠告ありがとうございます。でも、俺は特別不真面目に生きている積りはないよ。一体どうしたの？」

私には彼女が熱くなっている理由が理解できなかった。

「何が？」

「変だよ」

「変？」

「そう、何をそんなに熱くなっているの。おかしいよ」

「元々変な女です」

「元々じゃない。君はもつと優しくて素直な女性だった」

「人は変化するものです」

「変化し過ぎているよ」

「それじゃ、優しくて素直な女に戻れとでもおっしゃりたいの？」

「そう願いたいね」

「あなたに私の人格云々をいう資格なんてないでしょ。私はあなたの子供でも恋人でもないのだから」

私は何も言えなかった。確かに私には彼女の人格云々を言う資格はない。こうして麗華と居ること自体、麗華の彼氏に申し訳ないことではないか……。そんな罪悪感さへ感じた。

麗華は、いささか興奮した気持ちを抑えるためか、暗闇の中に視線をぼんやりと映じている。私も気分を変じて話題を変えた。

「彼氏はどうしているの？」

「彼氏？」

麗華は小首をかしげて不思議そうに私の目を見つめた。その愛らしい素顔は微塵も変わっていない。そんな笑顔を見ると、麗華は一生、この笑顔を絶やさないのではないかと五感で感じた。ところが、私が親しみを実感した次の瞬間、その素顔が爆発的な笑顔になり、彼女は吹き出したまま顔を伏せて笑い込んでしまった。

「何がおかしいの？」

私には彼女の行動が全く理解できなかった。

「だって……」

そこまで言うともた笑い込んだ。

「だって彼氏なんて最初からいませんよ。本気にされていたの？」
そうしてまた笑い込んだ。

「それじゃ、俺から離れるために嘘をついたのか」

「なぜあなたから離れる必要があるのですか？」

「何言っている、さんざん無視しておいて……」

「無視？そんなことはしていませんよ」

「空々しいよ」

「ただ気に留めなかっただけです」

「どうして気に留めなかった？」

「気に留まらなかったから……。ただそれだけ」

挑発的な彼女の態度に私はだんだん業腹になってきた。

「どうして嘘なんかついた」

「ほんの冗談ですよ。あなたもわかっていると思っていました」

麗華はまた嘲笑気味な表情を浮かべたが、すぐに真剣な表情に戻った。そして漁火に視線を向けてじっと黙り込んだ。やや肌寒い風に任された前髪を、そつと左手で横に流した。

どこも変わっていない。清純な笑顔も、魅力的な声も……。しかし、人格はたった一年の間に恐ろしいほど変化していた。

「君の嘘のために俺がどんなに苦しんだことが……」

それでも彼女は沈黙を破らない。

「どうしてあんなに俺を避けた！」

だんだんと私の言葉は詰問口調に変化していった。だが相変わらず麗華は海を見つめている。抑えきれない怒りの波が次々と私の胸から湧き上がってきた。ずつと蓄積されていた彼女への不満であり疑問であり怒りであった。

「何とか言ったらどうだ」

私の言葉に振り向いた麗華は、きつ、と私を睨みつけた。薄灯りのためにわかりにくかったが、彼女の瞳には涙が溜まっていた。

「泣けば済むのか？何も説明しなくて済むのか？どんなに他人を苦しめても……」

一度動き出した私の激情は簡単には収まらなかった。

「それじゃ殴るなり蹴るなり好きにして下さい！」

私も麗華を睨みつけた。彼女は唇をかみ締めて私を睨み、身体の向きを変えて手すりに背をもたれ掛けた。彼女の身体が小刻みに震えているのがわかった。

「女を殴れるわけがないだろ、ばか」

「男だつて殴れないでしょ！格好つけないで下さい。人間関係に正面からぶつかることを避けてばかりいたのですよ、あなたは……」。

そんなだから年下の女になめられるのよ！」

「そんなに言うなら殴つてやる！」

「どうぞ」

私は麗華の胸倉をつかんで引き寄せた。まるで縫いぐるみの人形の

ように軽かった。片手で部屋の中へ引きずり込んだ。背もたれがなくなつた麗華は自分では立っていられずにその場にへたり込んでしまった。相当怯えているのか興奮しているのか、私にも判断する余裕はなかった。

私は麗華の身体を放した後、何も言わずに震える彼女を見つめていた。やがて麗華の嗚咽が漏れ始め静かに部屋にこだました。私も少し冷静になりこれで事を収集しようとした。麗華は嗚咽を止めゆっくりと立ち上がった。

「ちゃんと立ちましたから殴ってください」

「もう良いよ」

「良くありません！」

「良いったら、もう」

「意気地なし！」

「……」

私はなぜか、子供の頃からこの言葉を浴びせられると頭に血が上り、冷静さを失ってしまう癖があつた。

「意気地なし！」

麗華は、私の神経が反応したことを悟つたのか、同じ言葉を繰り返した。

「意気地なし……」

今度は泣き声のような小声で呟いた。私は自分を制御できない不甲斐なさ、破滅へと誘う彼女の態度が悲しくて、心の中で号泣しながら、右手を振り上げてしまった。

一瞬白くなつた麗華の頬がすぐに真赤に紅潮し、間もなく大粒の涙が溢れ出てきた。麗華は両腕をだらりと下げたまま俯いて、ゆっくりと私の方へ歩を進めてきた。そうして倒れ込むように私の胸にすがりついて大声で泣きじやくり始めた。私は訳のわからないまま、麗華の震える小さな身体を支えていた。

夜の砂浜はとても静かだった。柔らかな波が砂浜をきれいに洗つ

た後、戻ろうとするときに快い音色を奏でる。それ以外に音を鳴らそうとするものは何もない。星がますます美しく輝いて見えた。潮の香りを含んだ風が、私と麗華の間をくぐり抜けていく。

私達は、海岸までふらふらと歩いて来たのだった。ほとんど口も利かずに貝殻の混じった砂浜に腰を降ろした。彼女は両脚をまっすぐに伸ばし、両腕を後ろに回して身体を支えている。そして、遥かな宇宙を望みつつ、快い浜風を全身で受け止めていた。

「痛かった？ だろうな……」

砂浜に胡座をかいて、貝殻を手に遊びながら謝罪しようとした。

「慣れていますよ」

「慣れている？ 誰にぶたれるの？」

「色々。でもあんなに強くぶたれたのは初めて」

「御免」

「いえ、いいの。私が悪いのですから。すみませんでした。私がどうかしていました。なんだか無性に腹が立って、何を言っているのかわからなくて……本当にごめんなさい」

「でも、女の子に暴力振るうなんて最低だよ」

私はそう言って、もてあそんでいた貝殻を海に放り投げた。かすかに波に跳ねる音がした。

「何かあったの？」

単調な波の音が、繰り返し、繰り返し、夜空にこだましている。

「もう、話題を変えましょう。恥ずかしいですから」

そうして、彼女は砂の上に横たわった。私も同様にした。

「いつかも一緒に青空を眺めましたね？ また忘れましたか？」

ちよっぴり失望したような口調であった。

「今度は星の数でも数えてみるか」

遠い、遠い闇の果てから、春の香りが漂ってきた。

翌朝、朝早くに目を覚ますと、朝食を摂ってから二人して早速出掛けることにした。彼女の叔母さんに教えられた鳴門の渦を見に行

くことにした。私としては、別段どこに行こうと拘泥しなかったの
で、勧められるままに従った。

道中、麗華はよく昔の話をした。まるで、彼女の伝記を聞かされ
ているかのようなであった。そして、私の過去もよく聞きたがった。

「君は将来何に成りたいの？」

バスの中で私が質問した。

「小学校の先生でした。以前は……」

「今は？」

「別に。何にも成りたくないです」

私は、返す言葉も見つからず、小さく吐息をついた。

「あなたは何になりましたか？ 昔」

「昔？ 小学生の頃はジャンボ旅客機のパイロットになりましたかった」

「今でもそう思っているの？」

「まさか、でも小型飛行機には将来チャレンジしてみたいな」

「だんだん現実的になりますね、折角の夢も」

「それが自然だよ」

「でも夢を失ってしまう人よりはずっと幸せですよ」

「俺だっけいつ失うかわからない」

「それならまた別の夢を持てばいいじゃないですか、良いお嫁さん
貰うとか」

「良いこと言うね」

「内海さんより内面は大人ですもの」

彼女は、笑顔を浮かべたものの、私にはとても曇って見えた。

福良の街でバスを降りて歩き始めた。観光船の乗り場へ向かって
海岸沿いの埠頭をぶらぶらと歩いた。特に観光をしたいという気持
ちもなく、このまま目的もなく歩いていても十分幸福であった。大
切な時間というものを、かくも無駄に過ごし得る、今の自分の境遇
が申し訳なく思える程であった。

数週間前までは、散歩すらノート片手に歩かねば気が済まないほ
ど、時間に追われた生活をしていた。更に、いつも心のどこかです

しりと重い心痛を発していた根本原因である麗華が、今、自分の隣を歩いている。散歩どころか、話すことを想像しただけでも胸が熱くなる想いに駆られていたのに、今はこうしてごく自然に歩いている。

だが、恐ろしいほどに無感動であつた。空想の中で体験した、甘い感慨などは微塵も無かつた。

観光船の中で麗華は子供みたいにはしゃいだ。船が渦に近づくとき大衆で歓声をあげて、私の腕にしがみ付いて来た。しっかりと私の手を握り、

「わあ、すごい！こわい！」

と恥ずかしくなる程大きくはしゃいだ。周囲の大人たちが微笑みながら私たちを盗み見ていた。麗華はどこにでもいる普通の女子中学生であることをこのとき実感した。

こんなに楽しそうな麗華を見るのは久しぶりであつた。時々遠くから彼女のはしゃいでいる姿を見ていたことはあるが、その時は私の心が沈んでいたのだただ眩しいだけであつた。

時折大きな波に船が揺られると、まるでジェットコースターにでも乗っているときのように喜々として私の胸に顔を埋めた。

そんな麗華がこの上なく愛らしいと感じた。今までのわだかまりなどは全部捨てて、もう一度素直に愛して、やり直せるような気持ちになつてきた。

もう、失敗したときの落胆を考えて自分の気持ちを誤魔化したり、恋心に翻弄されることを恐れたりしないと誓つた。こうやって彼女を抱きしめて生きていきたいと心から欲した。

潮流のあちらこちらで自然にできては消えていく潮の渦を眺めながら、時の流れの渦に揉まれてもがき苦しんでいた自分は、きっと今は渦が消えて静かな流れに乗っているのだらうと感じた。そして再び大きな渦が巻き起こって引き込まれることが当然のこととして想像できた。だが、もう恐くなどなかつた。麗華を抱き締めていると、どんな渦からでも抜け出せるような勇気が湧いてきた。

ふと気づくと、麗華が綺麗な笑顔で腕の中から私を見上げていた。そして揺れるデッキの上で背伸びして私の耳元でささやいた。

「好き……」

波が船体に弾けて潮の粒が舞い上がった。

『俺も好き』

と言おうとした刹那、潮を浴びた彼女がより一層大きな歓声をあげてけらけらと笑ったので、タイミングを逸してしまった。私は言葉を返す代わりにより強く彼女の肩を抱き締めた。

麗華は絞られるように身体をくねらせて、唇を私のほうへ向けて目を閉じた。私は一瞬意味がわからずに、硬直したまま彼女の唇を見つめていたが漸く意味を悟った。だが、まさかこんなに周囲に人がいるところで交わすわけにもいかず困惑していると、

「うそよ」

と、麗華が再び大笑いして私の頬を軽くつねった。

私は安堵とともに落胆を覚えたが、彼女の悪戯な笑顔がとても素敵で、潮の香りを思い切り胸に吸い込んだ。海原では群青の波が春の日差しにきらきらと輝いて、若い二人の未来を幸福に導いているかのようにあった。

瞬く間に六日目の朝となり、麗華と過ごす最後の一日となった。

その日は、ちょうど一年前に麗華に出会ったときの雰囲気彷彿させるような陽気であった。私たち二人は、朝からキャンプ場のある丘まで散歩しようとした。春風が新緑の香を運んで私たちの頬を撫でていく。

「もうすぐお別れですね？」

「いつでも会えるよ」

あっさりとした私の言葉に、麗華は少々物足りない様子であった。

彼女は何か言い掛けたままそっぽを向いてしばらく黙ったままで春の空気を胸いっぱい吸い込み、綿雲が点在する青空を見上げた。「帰りましようか」

吸ったばかりの、新鮮な空気を吐き出しながら麗華が明るく呟いた。

「どうして？まだ、半分も来ていないよ」

「美しすぎます」

「何が？」

「部屋の中にいたいです」

「どうして？」

「去年の頃のことか思い浮かんできて、悲しいです」

「君は振り返るのが好きだろ？」

「もう嫌です。悲しいです」

「何をそんなに悲しがるの？」

ぼんやりと立ち尽くす私を置いたまま彼女は歩き始めた。私は何も理解できずに、感傷に独りで浸っている彼女の自分勝手な行動に若干疲れを感じていたが、麗華の不可解な行動にも大分慣れてきていた。だから、あまり深追いせずに好きにさせることにした。

「じゃあ、先に帰っていて」

そう言い残して私は独りで歩くことにした。しかし、麗華がそばににいることに慣れてしまった私は、独りでいても全く楽しくなかった。それで、五分も歩くと踵を返した。

その日はほとんど話をせずに過ごした。テレビを見たり、本を読んだり、旅館の娯楽室でビリヤードをやったりして過ごした。卒業前の気持ちと同じで、今日が最後だと思うと、何か特別なことをして時間を大切にしたいという思いはあるが、結局出来ることは平凡に暮らすことだけであった。

夜も、いつものようにベランダから海を眺めて過ごした。別段話しはしなくても、二人一緒にいるだけで幸せであった。だが、いつもそうであったが、今が幸福のだと観念的には理解できるが、実感は湧いてこなかった。

人間は、幸せにも不幸せにも慣れてしまうものだ、数週間前の自分の境遇を思い起こしながら独り納得した。幸福の実感はなかったが、ただ、もう少しこの時間が続いて欲しい、何とかこのまま時

間を止めることはできないものかと、そんな虚しい欲望だけが繰り返し心に浮かんで来た。

「夜はまだ肌寒いですね、昼間は暖かったのに」

麗華が、ベランダの手摺に両肘を置いてぼんやりしている私の横に並んだ。彼女はピンクのカーディガンを肩に羽織っていた。頭上には満天の星が輝いている。

「君はいつまでここで療養するの？」

「春休みが終わったら家に戻りますよ」

「じゃあすぐに会えるね」

そう自然に発した私の言葉は麗華には受け取られずに、申し訳なさそうに夜のしじまに吸い込まれていった。

いつもは部屋から漏れてくる灯りがこのベランダの唯一の光源であったが、今夜は何という理由はないが部屋の灯りを消していた。その結果、いつもよりも周囲の闇が深く感じられ、その深くなった分だけ星空や漁火の明かりが際立って見えた。

麗華は手摺に両肘を置いて頬杖をついた。彼女の背丈ではほとんど背中を丸める必要もなく、ほぼ真直ぐに立っていた。

今夜はこの宿に来てから初めて浴衣を着てみた。二人とも部屋ではトレーナやジャージ姿で過ごしていたが、最後の夜なので風呂上に旅館らしい風情を体験してみた。いつかの夏祭りの情景がちらほらと脳裏に展開したが、まだ肌寒いためかすぐに記憶の風景は閉じてしまった。

「明日はいいお天気みたいで良かったですね」

麗華が真つ暗な海を見つめたまま呟いた。

この一週間、ほぼ毎日が晴天であり、気温も平年並みで安定していた。

「そうだね。雨ふりのサイクリングなんてつまらないからね」

と、何の変哲もない会話をしている自分が情けなく、焦燥感に駆られてきた。機械的に過ぎていく時間を何とかして止めたい気持ちが一杯で、先刻よりあれこれ思案はしてみるが、時間など止まるわけ

もなく、ただただ、この空気を、香りを、風の肌触りを、精一杯記憶に残す努力しか出来なかった。

ふと、私は本当に時間を止めたいのだろうかと思問してみた。確かに今の状況は心地よい限りではあるが、単にこの状況が終わることに焦燥を感じているのだろうか？終わるまでに何かをやり遂げなければならぬような気がした。この一年間、常に私の胸中で葛藤を続けて来たものが、最近になって漸く整理されて、麗華への想いを素直に認めることは出来たが、何か不足したものが胸の中でポカんと空虚な空間を空けていた。その空虚が何なのかわからなかった。そしてそれが得体の知れない焦燥の原因であるように思えた。

と、そこまで思考が走った時、不意に鳴門の潮の風景が閃光のように脳裏に閃いた。

「君に言い忘れていたことがある」

鳴門の潮が激しくぶつかり合い、自然にできた渦潮が白い飛沫を上げた瞬間、私の今までの焦燥感を払拭する快感が体内に充満した。

「何？」

と、真直ぐに海を見つめたまま柔らかく尋ねる麗華は麗華であった。いつも私の横にいる、小柄で初々しい色気を放つ麗華であった。

私はいつもと何一つ変わらない麗華に引き寄せられるように、まるで時の渦潮に巻き込まれるように、麗華の顔を覗き込んだ。そして彼女の視線が私の視線と絡んだ刹那、その小さな唇にそっと触れた。

彼女は頬杖を突いたままの姿勢で、唇を重ねたままじっとしていた。ほんの数秒の間二人の時間は止まった。思考も止まった。爆発しそうな心臓の鼓動だけが全身に響いていた。だが、なぜだか彼女の前髪が夜風に流されていることだけは感じていた。

とても柔らかくて長い時間であった。海風だけが何の遠慮もなく二人の熱い鼓動を冷却しているかのようにであった。

私はゆっくりと唇を解いて彼女の横顔を見つめた。彼女の瞳に星の輝きが反射しているように見えた。と、唐突に疾風が走って一粒

の星をさらっていった。

麗華は泣いていた。また一粒、今度は静かな風に流されて、目尻から真横にきらりと輝いて消えた。

「俺も好き」

私はあの時、観光船のデッキで言えなかった言葉を記憶から呼び戻した。彼女の涙の意味はわからなかったが、詮索はしなかった。後悔もなかった。これでいいと思った。自分の気持ちを正直に認めて相手に伝えた。こんな簡単なことをなぜ今まで出来なかったのか不思議ですらあった。

麗華はずっと同じ姿勢のままで、風の流れと時間の流れに身を任せているかのようにであった。沈黙が長い時間続いた。時折、汽笛や波の音が風に運ばれてやってくるが、すぐにしじまが訪れて来た。

私は彼女の反応には一切拘泥しなかったし、どんな言葉が返ってくるのかも気にならなかった。ただ、一切が静かに流れている。その静かな流れに二人で流されている。しかも二人で手を繋ぎ合って流されている。そんな落ち着いた感覚であった。

「あつ、流れ星！」

と、麗華が今までの静かな流れから飛び抜けるように、明るい声色で叫びながら星空を指差した。反射的に彼女の指差す方向を目で追ったが、時既に遅く、そこには漫然と輝く星たちが若い二人を見守っているだけであった。

「ね」

と、私に振り向いた彼女の瞳から最後の星が流れ落ちていった。流れ星の後には麗華の幼くて明るい笑顔が蘇ってきた。

いつまでもこうしていたい。二人はそんな思いをもって再び夜景を眺めた。自然で落ち着いた時間が流れ、私は時が経つことを恐れることも無くなっていた。そして、相変わらず特別な感動も幸福感も沸いては来なかった。ただ、心が通じ合っていると確信できた安心感と、麗華に必要とされているという自分の存在感。そして自分の本心を言葉にすることが出来た解放感。これらが重なり合って、

私は満ち足りて平静な心境に陥っていた。実はこれが本当の意味での幸福感なのかも知れないと、折節麗華の横顔を眺めながら結論づけた。

ついに、出発の朝が来て全員が集合した。麗華も見送りに来てくれた。

「また、学校に遊びに行くからね」

と、河口が別れの挨拶代わりに言葉を投げた。

「お待ちしています」

「早く帰ってやってよ、麗華ちゃん。内海が寂しがるからね」

麗華は、田山の冷やかに微笑みだけを返して、抜けるような青空を見上げた。

「それじゃ、行こうか」

河口たちが出発した後も、私はペダルを踏み込むことが出来ず、少しの間だけ彼女の瞳を見つめた。すぐにまた会えるのだから、何も感傷的になることはないのだが、ここでの思い出たちとも別れてしまつようで、春の日差しが優しすぎると感じた。

麗華の瞳がやや潤んできた。私は彼女の涙につられないように笑顔を浮かべながら、

「さようなら」

と、明るい口調で挨拶した。月並みな言葉しか出てこない自分に歯痒さを感じたが、この時ほど、この言葉の持つ寂しさを実感したことはなかった。

「さようなら……」

麗華も笑顔を浮かべて言葉を返してくれたが、心持ち震えていた。私は、力強くペダルを踏み込んで前の二人を追った。振り返りたかったが、漠然とした見栄のようなものがそれを押しとどめた。背中で麗華に手を振りながら、また会える日を楽しみにして、前向きに暮らしていこうと自分に言い聞かせた。そうして春の空気を胸いっぱいに吸い込んだ。

本心（前書き）

もしよろしければ、前段は松山千春さんの「窓」中段は「空を飛ぶ鳥のように野をかける風のように」後段は「青春？」を部屋に響かせてお読み下さい。どこで段を切るのか？すみません、お任せします。

本心

四 本心

高校生活が始まった。毎日が希望と不安の交差する様々な刺激に満ちていた。新しい生活に忙殺されながらも、麗華のことはいつも念頭にあった。春休みに旅先で別れて約二週間余り、電話もまだ掛けていなかった。彼女が戻れば連絡があるはずだという思いと、新生活の準備やら男友達とのどうでもいいような約束に付き合わされて何かと忙しかった。四月も終わり近くになった日曜日、漸く連絡を取ろうとしていたところへ、突然直子が私の家を訪ねてきた。

彼女は、玄関先で挨拶もせず、笑顔も浮かべずに封筒を私に手渡した。

「何？これ」

「後で開けてください」

直子の表情は深く沈み、それだけ話すのが精一杯の様子で、今にも泣き出しそうであった。

「どうかしたの？」

私の問いに彼女はじつと俯いた後、思い切った様に顔を上げて、

「もう、いないんです、麗華……」

と、言い残して俄かに去ってしまった。私は漠とした不安と破裂しそうな心臓の鼓動を感じながら、緊張と不安で震え始めた手先で封筒を開けた。

中には、一束に纏められた数枚の手紙と、紙質の違う一枚の手紙が入っていた。まず、一枚の手紙から読み始めた。手紙の送り主は麗華の母親であった。

『突然、このようなお知らせを致しまして誠に恐縮に存じます。しかしながら、いつまでも隠し通せる事でもなく、勇気を奮って筆を執りました。どうかお氣を確かにお持ちください。』

娘の麗華は、四月十五日の夜、静かに息を引き取りました。死因は急性リンパ性白血病です。治療の困難な難病である上に発見が遅れ、病名が判明した時点では、既に手遅れであることを医師より知らされました。

勿論、本人には知らせておりませんでした。娘には、貧血症である旨だけを伝えておりました。夏休みと同様に、春休みになると、本人が私の姉の所へ行きたいと申しましたので、姉に預けておりました。そこへ、あなたが偶然、訪れていらしたことも聞いております。私はあなたを責めるつもりは毛頭ございませんから、誤解のないように聞いてください。事実のみをお知らせ致します。

麗華は、あなたが姉の所を出られてから、二三日後に病床に伏したそうです。私もすぐに駆け付けましたが、娘の体力は日に日に衰えて行くばかりでした。娘は、病床で何か一生懸命に書き続けていました。が、ようやく書き終えたらしく、心残りなく世を去ったようです。

娘の願いで、葬儀にはあなたをお呼びしませんでした。その代わりに、死ぬ間際まで書き続けていた、あなたへの手紙をお送り致します。

本来ならば、娘がお世話になった内海さんに直接お会いして、お礼と共にお渡しすべきものとは思いますが、まだ気持ちも落ち着かない状態でございます。どうか失礼をお許しください。

また、娘のことは一日も早く忘れて、あなたの人生をしっかりと歩んで下さい」

私は、一気に全身の血を抜かれたような衝撃に襲われた。ただ、何もかもが信じられず、自分の存在すら信じられなかった。ぼんやり立ちつくしたまま、倒れることすらできなかった。悲しみも苦しみもなかった。何度も何度も、手紙を読み返しているうちに、麗華の可憐な姿が脳裏にぽっかり浮かんできて、ようやく涙が溢れてきた。

そして、信じたくない気持ちと同時に、不可解だった彼女の行動

が次々と思い浮かび、そのひとつひとつの疑念が流れるように溶解していくような感覚が腹の底から湧き上がってきた。

私は全身の震えを抑えながら、その場に塞ぎこむ知恵も浮かばずに、立ち尽くしたままでもう一つの手紙の束を紐解いた。

『内海さんへ』麗華の手紙の冒頭にはこう記されていた。

『お久しぶりです。お元気ですか？あなたにこのような驚きを与えてしまうことを本当に申し訳なく思っています。ごめんなさい。本当は、このような手紙をしたための積りなど、毛頭もございませんでした。このまま、誰にも本心を明かさずにこの世を去る積りでいました。』

しかし、最後に神様が私に幸せを与えて下さいました。まさか、あなたがここへ来られるなんて夢にも思いませんでしたから……。

私は、後何日生き長らえるか、自分でも見当が付きません。衰弱のために、毎日少しずつしか書くことができません。もし、途中で終わってしまうようなことがありましても、気を悪くなさらないで下さいね。

私はあなたにお詫びしたい気持ちでいっぱいです。何もかも、あのままに白状します。私は、あなたのことをずっと愛しておりました。心からお慕いしていました。一年生の頃からずっと見つめていたのです。

それが、あの日突然お知り合いになれて……。私は神様に感謝しました。しかも、あなたは私にとても優しくして下さいました。肩を並べて通学したり、一緒に買い物に出かけたり、あの頃ほど生きている喜びを実感したことはありませんでした。

ところが、幸せなんて長続きしないものです。ある日、私は激しい貧血に見舞われました。以前から時々はあったのですが、次第に頻度が多くなり、症状も激しくなってきました。

病院をいくつか回りましたが、これといった原因はわからず、とうとう大学病院で精密検査を受けることになりました。しかし、それでも特に異常はないとの診断でした。私は少し安心して、普段通

りの生活に戻りました。でも、激しい運動は止められましたので、部活動は休部しました。

ところが、精密検査を受けてから何日かたったある夜、私は両親が話しているのを聞いてしまいました。私の病気が難病で、とても治る見込がないことを。私は、自分が死ぬのだという実感が湧かず、他人事のように両親の話しを盗み聞きしていました。が、部屋に戻って独りになると、漠然とした実感のない恐怖感に苛まれました。

それから数日間、私は苦悩の中で身悶えしていましたが、その苦しみと反比例して人前では明るく振る舞っている自分が不思議でした。自殺することも何度か考えましたが、母の作り笑顔を見ているうちに、いつしか、精一杯残された人生を全うしようという勇気が湧いてきました。

人間はいつか必ず死ぬものです。しかし、気になるのがあなたのことです。初夏の頃の二人の気持ちをそのまま続けていれば、もっと親密な関係になれたと思いますし、健康だった私はそうなることを望んでいました。

しかし死ぬと決まった以上は、私はあなたと仲良くしていただけないと思ったのです。突然の、私の死を知ったあなたの衝撃を想像するだけで、その責めに耐えられませんでした。

私の命は後一年ということでしたから、夏までは生きられる筈なのですが、万一予想よりも早く、あなたの人生を左右する受験前にも死んだりしたら、大変ご迷惑をかけることになります。

そう考えた私は、あなたとの交際を絶ち切ることに決心したのです。勝手な憶測で結論を出してすみませんでした。何も、私から絶交仕事をしなくても、あなたから嫌われる運命にあったのかも知れません。独りよがりの、独り芝居と笑われても構いません。とにかく、あなたの人生に余計な波風を立てたくなかったのです。

あなたには、私の行動がさぞ不可解で、気を悪くされたことと思います。私は、そのすべての謝罪をここにさせて頂きたいのです。恋人の作り話をしたり、無視したり、避けたり、友人の前であな

たの悪口を言ったり、随分あなたのプライドを踏みにじりました。とても許して頂けるような浅い罪だとは思っておりません。しかし、そうすることしか出来なかったのです。あなたの前で両手を着いて懺悔したい気持ちでいっぱいです。本当にごめんなさい。

もしかすると、あなたは気づかれていたかも知れませんが、自分の命の期間を知ってから私は、自分でも驚くほどに変化しました。強くなった反面、冷淡にもなりました。でも、突然、死を告知されたうえに、大好きな人から離れなければならなかったのですから、どうか大目に見てやって下さい。

あの頃の私……そう、あなたと知り合った頃の私は、とにかく自分の気持ちに素直な人間になろうと努めていました。ひねくれたり、意地を張ったりすることを、極力避けていました。周囲の人に、清純な少女の印象を与えるような、そんな女でいたいと思っていました。

そんな私からあなたを見つめたとき、あなたは意地を張るために生きているような方でした。誇りだとか何だとか、いろんな文句を並び立てて、自分の素直な感情をいつも抑えているような。いつかは、そんなあなたを変えて差し上げようと思うほど、私は、自分に対しても周囲の思いやりに対しても、素直でありました。

しかし、そんな私が急変しました。第一に、あなたから離れようとする行為自体が私の心に反しています。そのために、私自身の中で作り事や、嘘や、虚飾が生じ、それらがどんどん増殖していき、本来、私が理想としている人物像との間に、大きな溝を掘り下げて行きました。

そして、そのストレスは、すべて死というものに辿り着いてしまします。その都度、私は自己嫌悪に陥り、自暴自棄になり、或いは周囲の人達を猪疑の目で伺ったりするようになっていきました。当然のことながら、周りの人達にも私の変化は敏感に伝わっていきましました。私は自分の理想から離れ、周囲のお荷物に落ちぶれて行く自

分をはつきりと認識していながら、どこかで、そのことに快感さを感じていました。

あなたとこの島で再会したとき、正直、大変悩みました。あなたは受験を終えられたので、もうすべてを打ち明けて、嘘から開放されたいという欲求もありました。真実を打ち明けて謝罪したいという気持ちでいっぱいでした。しかし、すべてを打ち明けたところで、二人して何の希望も持てず、ただ、削られていく命を、失っていく時間を耐えるだけのつらい余生となってしまいます。

それよりも、あなただけでも希望を抱いて、私との幸福な関係が将来も続くのだという、ごく当たり前の感性を以って私に接して欲しいと考えました。もっと簡単に言くと、やり直したかったです。あなたが受験を終えられて、最悪のシナリオが消えたために、あなたと出会った時に戻って最初からやり直し、残りわずかな期間でも普通の恋人たちが体験する幸福な時間を過ごしたいと考えました。ですから、結局あなたに直接謝ることも出来ず、さりとて、病気を知る前の素直な自分に切り切ることも出来ず、この島でもあなたに不可解で嫌な女の所作を露呈してしまいました。本当に申し訳ないと思っています。

去年の秋ごろから、あなたはよくぼんやりと校舎の窓から外を眺めていらっしゃいました。あれは多分、楽しかった日の思い出を、背中合わせになる季節から振り返っていらしたのだと思います。これは決して外れていないと思います。なぜなら、私も、同じことをしていたのですから。そんなあなたの姿を見つける度に、心臓を針で突かれるような痛みを覚えました。あなたの苦しみを考えると、本当に背中から心臓に杭を打たれるような辛さを感じずにはいられませんでした。

しかし、私も同様に辛かったのです。何も、好き好んで嫌った振りをしていたのではないのです。何もかも仕方が無かったのです。私には、そうする以外に何も思案は無かったのです。

あなたは、あの夏祭りの夜のことを覚えていらつしやいますか？御存じの通り、あの時持ち出した過去の恋人なんて、架空の設定でした。この嘘の理由はもう繰り返す必要はないと思います。この件に関しても、あなたがここに滞在している間に素直に謝りたかったのですが、なぜか頑なになってしまつて、素直になれませんでした。

この島で、あなたと再会した頃の私は、なぜだかあなたに対してとても反抗的な態度をとつてしまいました。自分でも良くわからなかったのですが、不思議なくらいに自分の心とは裏腹な言葉ばかりを にしてしまいました。

でも、今にして思えば、単にあなたに甘えただけなのかも知れませんか。恐らくあの頃から、私が心の隅に追いやつていた死への恐怖が動き始めたのだと思います。何もかも白状して、あなたに泣きすがりたかつたのです。すがりついて、救いを求めたかつたのです。あなたに力一杯抱きしめられて、死神の強大な力から守つて欲しかつたのです。私の運命を変えて欲しかつたのです。

勿論、あなたにそのような力があるとは思いません。ですから、ただ、甘えたかつたのです。何をどうしろと言うのではなく、子供が母親に甘えて駄々をこねるように……。ただただ、ご迷惑をおかけしたことをお詫びします。扱いにくい女だつたでしょ？ごめんなさい。

私はこの手紙を、あなたと過ごした部屋で綴っています。勿論、ここに寝たきりです。入院しても命が助かるわけでもないのです、我がまま言つてここに置いてもらっています。

ここで、あなたにぶたれましたね。また忘れましたか？あの時は、自分が甘えているなどとは露ほども思つていませんでした。ただ、あなたに腹が立っていました。あなたが余りに時間を無為に過ごされていたものですから、時間の無い私にとってはとても腹立たしかつたのです。

勿論、あなたは受験を終えて、息抜きに来られていたのですから、

それは至極当然のことなのですが、私には堪らなく辛いことでした。夜空の闇と海の闇。あなたは、無限の奥深さを持った夜空の闇の方が好きだと言われました。あの言葉も私の癪に触る言葉だったのかも知れません。

あなたにぶたれたことも良い思い出ですが、やはり一番大きな出来事は、最後の夜に、ここであなたにキスされたことでした。本当に嬉しかったです。『好き』と言われたことも幸福でした。後でも書きますが、夏祭りの時に告白された時はとても複雑な気持ちでした。でも、今回は心底嬉しかったのです。とても嬉しくて幸せで、世界で一番、今の自分は幸福だと感じました。だから余計に悲しくなりました。こんなにも順調にあなたとの距離が縮まっているのに、それ以上に私の命が縮まっています。涙が止まりませんでした。驚くほどたくさんの涙が流れ出てきました。幸福を感じれば感じるほど悲しくなりました。もしかしたら、もう二度とあなたにキスされることは無いかも知れないと、直感的に感じました。あの日の朝、散歩を途中で止めたのも、実は体調が悪かったからなのです。ですから、もうあなたと二度と会えないかも知れないという予感を全身で感じてもいました。

涙が止めど無く溢れてきて、あなたに顔を見せられませんでした。じっと、真っ暗な海を見つめて、夜風で涙を乾かすことしか出来ませんでした。本当は、あのままあなたの胸に抱きついて、思い切り泣いて、すべてを告白してしまえばどんなに楽になるだろうかと、誘惑に負けそうになりました。でも、何とか頑張りました。案外、私も内海さんと同じ位に頑固なのかも知れませんね。

私は、病床に着いてからは過去を振り返ってばかりいます。もっとも、それしかできないのですが……。春休みにサイクリングに出かけて、初めてあなたと知り会えたでしょ。実は、私はあなたが来ることを知っていたのです。直子さんと河口さんがうまく計画して下さったのです、本当は。偶然なんかじゃありませんよ。私はその

前からあなたにすごく興味を抱いていました。そのこと知った直子さんが一役買ってくれたのです。

私は、どれほど彼女に感謝したことでしょう。あなたは私の期待していた通りの方でした。とても優しく、たくましくて、ちよっぴり格好良くて。口下手なのが意外でしたけど。できるなら、もう一度あの山に登りたいです。あの湖に舟を浮かべたいです。そして静かな春の湖面で長閑な日差しを浴びて、希望に満ちた新芽の香りを肺いっぱい吸い込んで心を洗いたいです。暖かな優しい春風で身体を洗いたいです。

お祭りの日、神社の鳥居の下で、あなたに好きだと言われたときには全く動揺してしまいました。本来なら、幸福感で満たされるはずなのですが、皮肉な運命を恨む気持ちでいっぱいでした。

前述した通り、あなたをお誘いしたのは、交際を絶ち切るためだったのですから。つまり、あの夜はすでに自分の病気のことを知っていたのです。もう少し早く、あなたがあの言葉を吐いて下されば、人並みに告白を受ける喜びを体験することができましたのに……。本当に皮肉ですね。

私の計画では、あの時にはっきりと離別の言葉を投げ掛けたかったのですが、あなたに先を越されてしまった後に、冷厳な宣告をするほど大胆でもありませんでした。

でも、このままではいけないと思い、歩きながらあれこれ思案した結果が、月並みですけど架空の恋人の創作だったのです。今から思うと、別れるなら別れるで、はっきり宣言するべきでした。私が婉曲的な意思表示をしたために、余計にあなたを苦しめてしまいました。本当にごめんなさい。

その後、私がどんな冷酷な態度をとったかは、あなたが一番よく御存じでしょう。中途半端な別れ方では、私自身、きっと別れられないと思いました。一切、口も利かない程に徹底しないと、決意が揺らいでしまいます。何もかも仕方が無かったのです。あなたのために冷たくしたのです。私には、それしか出来なかったのです。好

き好んで、あなたの存在を無視していたわけではないのです。

人間は死が近づくにつれ、きれいな心になるといわれます。私の命の火も後わずかです。私も心が落ち着いて、何にもこだわらなくなってきました。こういうのを、きれいな心と表現するのでしょうか？よくわかりません。でも、元通り、いえ、それ以上に素直で正直な気持ちになってきたと感じています。

本当の心。本心が私を支配し始めたように思います。その結果、私は最近、恐ろしい自分を見出してしまいました。決して、自分では認めたくない真実が現われ始めました。

私にはやりたいことが、まだまだたくさんありました。しかし、そのほとんどをやり残さねばなりません。勉強などしても何の役にも立ちません。当然成績も悪くなります。走りたくても無理はできません。運動も止められました。大好きなバトミントンも諦めました。人間の行動の原動力である希望を閉ざされてしまいました。その不満が、私のからだの中に日増しに積み重なっていきました。音が聞こえるくらい、ずしずしと積み上げられていきました。

あなたには、そんな経験はありますか？そして、そんな状態でどうやって精神の均衡を保っていられるのでしょうか……。普通の人以上、精神に異常をきたしても不思議ではありません。ですから、私も異常になっても何ら不思議はありませんでした。

しかし、私は、一応正常でした。別に、私が特別な人間なわけではありません。私には、その積もり積もった不満を排出するところがあったただけなのです。それは、つまりあなたそのものだったのです。私があなたに冷たく接しますと、あなたはそれに応じて悲しむのです。廊下ですれ違いざまに窓の外に視線を外して、あなたを無視するとあなたは深刻に悩むのです。わたしがあなたを避けると、深く、深く苦しむのです。そして、ほんの少し愛想よくすると、あなたは喜ぶのです。あなたの心持ちなど、手に取るようにわかりました。感情をそのまま態度に表す方ですから。それがとても楽しか

ったのでしょうか。

つまり、あなたは私の玩具だったのです。考えてもみてください、自分の人生が終わろうとしているときに、他人のために自分が犠牲になるうなど考えるお人好しがどこにいますか？あなたが悲哀に満ちた表情で、ぼんやり窓の外を眺めていらつしやるとき、確かに私は胸を割かれるような苦痛を覚えしました。しかし、同時にこの上ない快感をも実感していたのです。

勿論、私にも良心はあります。そんな冷酷な自分でありたくないという虚栄心もあります。こうして、懺悔しているたつた今も、葛藤を続けています。その良心や虚栄心を『あなたのために』という献身的な言葉を使って自分の醜さを覆っていたのでしょうか。

実際、つい先程まで何の疑問も抱かなかつたのですから。自分の行動を献身だと思い込み、自分を甘やかし、あなたのうるたえる姿を見て心を満たしていたのです。自分が傷つかない理由を見つけてあなたを苦しめ、玩具にして自分の不満を解消していたのです。

このようなことを、あからさまにしてしまつては、きっと私は嫌われると思います。でも、結構です。漸く、自分の本心を理解したのです。素直になれたのです。清純という言葉に憧れていた自分を今、嘲笑しています。

もう、そろそろ書き終えねばなりません。気持ちを綴ればまだまだ綴り足りませんが、そんな体力も気力も無くなってきました。最近では、死に対する恐怖感も無くなってきました。早く死んでみたという気持ちも現われてきました。身体は死んでも、魂は生き続けると言われます。そうなれば、私はあなたのそばにずっといます。私の声があなたに届かなくても結構です。そばにいてだけで十分です。今度は私が無視される番ですね。

また、きれいな事を言っていました。どこに死を望む人間がいましようか。私は最後まで正直でいたいです。ですから本音を吐きます。死ぬのは嫌です。絶対に嫌です。もう一度、あなたに会

いたいです。会って抱きしめてほしいのです。どうかお願いですから、私を死神から守って下さい。この悪夢から救い出して下さい。今すぐここに来て、私の手を握り締めて下さい。死ぬのは嫌です。もう一度やり直したいのです。今度は、もっとあなたと仲良くしたいのです。死ぬのは怖いのです。どうか昔の私に戻して下さい。せめて時間を、時間を止めてください。

あなたにこんなお願いをしても、叶うものではないことは百も承知です。でも、あなた以外のどなたにお願いをすればいいのですか？神様？仏様？あの方達が、私の運命をお定めになったのです。やはり、あなたしかいません。私が愛しているのはあなただけです。こんなにもあなたのことを愛しているのに、どうして助けに来て下さらないのですか？死ぬなんて絶対に嫌です。あなたに会えなくなるなんて耐えられません。お願いですからもう一度会いに来て下さい。お願いですから、どうか助けて下さい……。

恥ずかしながら、すっかり、本心を現してしまいました。無理なお願いもしてしまいました。でも、もう謝る気はありません。

いつか、私に素直になれとおっしゃいましたね。お望み通り、これが私の素直な気持ちです。人間が人間らしい感情を書き残して死にます。きっと私のことを嫌いになったでしょう。どうぞ嫌いになつて下さい。もう、私のことなど忘れて下さい。そして、素敵な恋人を見つけて下さい。いつか可愛いお嫁さんをもらって、平凡で幸福な家庭を築いて下さい。あなたのやりたいことを思う存分にやつて下さい。もし辛くて仕方が無いときや、寂しくて仕方が無いときは、私のことを思い出して下さい。私はいつもあなたのそばにいます。そして私の名前を呼んで下さい。きっと、きっと返事をしますから……。

それでは、そろそろお別れさせて頂きます。こんなに短い人生でしたけれど、最期にあなたに巡り合うことが出来て本当に幸せでした。この島であなたと過ごした一週間で、一生分の幸福を頂きました。

た。ありがとうございました。そして、私のことは一日も早く忘れて、内海さんの人生をしっかりと歩んで下さい。そして、必ず、必ずお幸せになって下さいね。

では、さようなら……。

麗華』

私はその夜、一睡もせずに何度も何度も手紙を読み直した。これで麗華の不可解な行動や言動の理由がはつきりとわかった。もうすっかり涙は枯れ果ててしまった。泣く気にもなれなかった。悲しみも感じなかった。言葉では表現し得ない衝撃、全身を壁に叩きつけられて、すべての感覚が麻痺してしまったような重たい衝撃に包まれていた。

ふと気がつくと、すっかり夜が明け、陽が昇っていた。私は、夢遊病者のように虚空をじつと見つめたまま、ふらふらと外へ出て行った。外は余りに眩し過ぎた。余りにも日差しが柔らか過ぎた。真っ青な空に白い雲がほんわかと浮かび、微風が春の香りを乗せて漂ってくる。

私はそのまま、ふらふらと中学時代の登校路を歩いていった。麗華といつも待ち合わせをした寺の門前を通り、一緒に駆け上った橋を渡り、初めて言葉を交わした校庭の緑の広場へやって来た。桜はほとんど散っていた。落ちた桜の花が時折風に巻かれて舞い上がった。いつも春であった。麗華が幸せそうに笑っているのは、いつも春の柔らかな日差しの中であった。ふと、桜の木の下で麗華が優しく微笑んでくれたような気がした。

「麗華……」

私は、また涙を浮かべた。もう、涙は枯れたはずなのに、感情を実感する能力さへ失っているのに、自然に目頭が熱くなってくる。

だが私はもう泣きたくなかった。いつまでも泣いていると麗華に叱られそうな気がした。麗華が悲しむような気がした。泣いている姿を見せると麗華が心配すると思った。しっかりと生きて、私が幸せ

にならないと麗華も幸せになれないような気がした。

私は一生、麗華と共に生きて行くと決心した。どんなことがあっても麗華のことは忘れないと決心した。麗華を幸せにすると決心した。麗華を世界一幸福な女にすると決心した。

私は、麗華を幸せにするために泣くのはもう止めると決心した。私はすべてを払いのけるように、思い切って右手で涙を拭った。

『涙を拭くと、そこには柔らかな春があった……』

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4344p/>

すれちがいの季節

2011年6月17日16時38分発行